

神事芸能の細男^{せいのう}について

福原敏男

はじめに

- 一 近畿の細男
 - 二 九州の細男
 - 三 諸国の細男
- おわりに

論文要旨

細男（人間が演ずる芸能と傀儡戯）は日本芸能史上の謎の一つである。従来は九州の八幡宮放生会の視点より理解され、九州より近畿に伝播したという暗黙の理解があった。それに対して本稿では、人間の芸細男は奈良・京都の太神社における芸能構成の一つとして成立した、とみる。東大寺では九世紀末、京の御霊会では一世紀にみられ、一二世紀には白面覆と鼓の細男が確認できる。春日若宮祭礼でも平安期より祭礼に登場している。

宇佐八幡宮放生会には、近畿より人間芸細男が伝播し、元寇撃退の神威発揚を象徴する儀礼として神話的に意味付けられた。これは八幡縁起や縁起絵の変貌と軌を一にするものであった。杵原八幡や阿蘇の細男は宇佐より伝播した。大鳥社・諏訪社・杵築社へは、一宮・国衙型祭祀の一環として伝播した。

一方、鎌倉期には石清水八幡宮を中心に傀儡戯の細男が確認できる。それは大山崎神人が勤める日使頭祭において演じられ、二体の傀儡（武内と高良神）の打ち合わせである。鎌倉期の宇佐放生会にも傀儡戯が存在したが、これは細男とは認識されていない。宇佐の傀儡や細男は百太夫を祀った。杵原八幡の細男は傀儡戯ではないが、ここにも傀儡の痕跡があり、善神王や武内が傀儡の神であった。細男と傀儡とは不可分の関係であり、人間芸の細男舞は傀儡神を和ませる意味をもっていたといえる。宇佐の放生会頓宮における夷社や杵原八幡の浜殿における善神王や武内大神は、放生会に立つ市・市神としての夷・夷を齎く傀儡の関係を象徴している。

はじめに

一九八八年八月一日、私は福岡県古宮町の八幡古表神社の放生会海上渡御において傀儡戯、細男舞と神相撲を見た。細男舞は、鉦の舞、神歌、八乙女からなる。「ていとうていとう」と羯鼓を打つ細男舞の仕種は中世を感じさせるが、「テケ、テケ、テン、テン」と囃子に合わせて取る神相撲は近世を感じさせる。本稿はその時の印象を何とかして表現し、日本芸能文化史上の謎である細男の実像に迫ってみたい。

せいとう（細男・才男）について『日本国語大辞典』を繙くと次の四つの意味が載る。

一 神楽で人長の舞の後、余興として滑稽なわざを演ずる人、また、その舞。

二 能楽の翁の特殊な演じ方の一つ。三番叟の演技で、揉の段の舞の後、鈴の段に移る際の謡および詞に特徴がある。

三 平安時代頃から、神社の祭礼や御霊会などで舞を舞った舞人。また、その舞。現在、奈良の春日若宮の御祭で行なわれているものは、白丁姿で、六人のうち二人は笛を吹き、二人は腰に鼓をつけ四人で舞う。さいのう。ほそおとこ。

四 山城国（京都府）山崎の離宮八幡、宇佐八幡などの祭礼や、京都の御霊会などの行列の先駆の人形。

実際にはこのように判然と分類できないところに細男の複雑さがあり、

声納・勢納・声翁・青納・青農・細南・細尾などと史料にでる表記の多様さも、混沌とした細男成立と展開の歴史を象徴しているようである。その読み方もくわしお・せいとう・さいのう・ほそおとこなどとは様ではない。細男をシテテイという事例もあり、鎌倉期の辞書『名語記』に「テイハ打也」とある如く、傀儡戯でも人間芸でも打つ芸が基本であろう。人間による細男の特徴は顔に白い布を垂れて覆い胸に腰鼓をさげて打つ姿にあると思われ、この姿は鎌倉後期成立の『八幡愚童訓』（甲本）⁽¹⁾による。即ち、神宮皇后の三韓征討に梶取をつとめる安曇磯良が海中より出現する時に、

余ニ顔ノ悪キ事ヲ恥給テ、淨衣ノ袖ヲ解テ御顔ニ覆テ、御頸ニ鼓ヲ懸ケ細男ト云舞ヲ給ケリ。サテコソ今ノ世儘モ、細男ノ面ニハ布ヲ垂タリ。

とあり、この不思議な舞が細男という芸能の起源として説明される。また、その磯良を招き出すのが、五人の神楽男と八人の八乙女による神楽である。これは『太平記』第三九巻にも盛り込まれ、以降八幡縁起や太平記の享受史とともに磯良に細男が重ね合わされ、人口に膾炙されていった。

これに対してただ淨衣神職姿という細男もあり、そのイメージは曖昧模糊としていて決め手がない。

細男舞Ⅱ磯良舞Ⅱ海部の芸能Ⅱ御神楽の才男と解いたのが折口信夫で、「才の男が精霊役で、別に、此神に対する神があり、神がして、才の男がわきと言う風に、対立して演じ」⁽²⁾られるものであり、本来才男は神に

対する「お迎え人形」であったという。才男が人長の招きに応じて舞うのは、磯良が神楽の雅律によって細男舞を演じたことによるという。

御神楽の小前張の曲に伊勢の地名に由来する「磯等」「磯良崎」があり、その歌謡に鯛を釣る海人が出る。⁽³⁾この曲の採り物の後に人長が才男を召して猿楽芸（滑稽態）を披露させるところから、折口の発想が御神楽の「磯等」「磯良崎」の才男から八幡の「磯良童」＝細男と広がっていったものと思われる。⁽⁴⁾

以降西角井正慶⁽⁵⁾、西田長男⁽⁶⁾、鈴鹿千代乃⁽⁷⁾により師説が継承され、『日本国語大辞典』に細男、才男が同所に載るのも折口説の影響である。

しかし、八幡の磯良と細男は鎌倉後期に結びついたもので、その結びつきに御神楽の影響があったか知らぬが、才男と細男は区別して研究の組上に乗せねば混乱を来す。

後藤淑は「才男」は「さいのおとこ」と読み「せいのう」と読んだ例はなく、御神楽の史料には「才男」とあるのみで「細男」という例は全くない、という。⁽⁸⁾私は国語学の知識はなく読みについては云々できないが、神楽の才男を細男と記した史料は知らず、細男と才男は分けて考えるべきだと思う点で後藤説を支持するものである。

なお、『日本国語大辞典』二の翁の細男は三・四の神事芸能から流入したものと思われ、『わらんべ草』⁽⁹⁾に「せいのう、色々六十六番のならひあり。」とあり、細男は翁猿楽の異式演出でもあった。

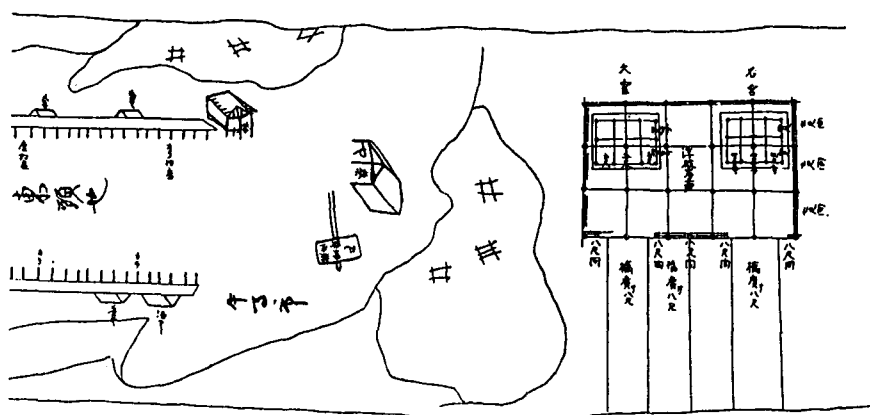
本稿では、三・四の神事芸能の細男を対象にするが、三＝人間・四＝人形（傀儡）と単純に分類できない。

折口系以外の細男研究、永田衡吉⁽¹⁰⁾、滝川政治郎⁽¹¹⁾、角田一郎⁽¹²⁾、井浦芳信⁽¹³⁾などの研究は、基本的には宇佐の傀儡戯を中心にした細男源流考であり、それは八幡宮放生会に収斂する傾向をもつ。先学が依拠するのは、細男と磯良が結び付いた鎌倉末成立である『八幡愚童訓』などの縁起叙述、それが絵画化された南北朝以降成立の縁起絵及び細男が宇佐八幡宮放生会に演じられる鎌倉末以降の祭記録や歌謡などであり、言うならば中世神話や儀礼に現れた細男から始源を辿ろうとしている。かつて宇佐八幡宮の放生会に参動した傀儡芸能として古表・古要両社の細男舞・神相撲が現存していることが始源遡及傾向に拍車をかけている。

しかし、宇佐放生会の細男は、後述するように中世における元寇撃退と不可分の関係にあり、細男像は研究者の主観によるところが大きい。細男研究に限らず、八幡の深淵には誰もが招き寄せられてしまいうらしく、阿部泰郎はこのような研究状況に対して警鐘を鳴らしている。⁽¹⁴⁾

「八幡とは何か」という問いかけは、たんに古代の始源ばかりを追求するのでは、「八幡の藪知らず」ならぬ深い闇を手探りするばかりである。それは、限られた断片的な資料を元にして恣意的にそれぞれの観念や先入主に宛てがって始源に還元していく不毛を、思わず導き入れるおそれがある。むしろ、登場してより以降に豊かに残される八幡神をめぐる言説や出来事、この現象を如何にとらえ、それらの記述をどう解説するかという、そのものに則した視線が大切ではなからうか。

細男の分布は九州に偏在しているのではなく、むしろ近畿地方に古い



法用場莊嚴并假屋注文」

史料や伝承が存在しており、後藤はすでにこのような可能性を暗示している。⁽¹⁵⁾

細男は御霊会などと関係が深く、京都地方で細男舞が形を整えたの

ではないか。細男が

海と関係があり、悪

霊除去、清め、祓い

と関係があったため

に安曇氏と結びつき、

北九州にひろまった

のではないかという

逆な想像も可能性を

もつことになる。

成立論としては傾聴す

べき見解であるが、伝播

論は未だ折口以降の古代

の海部—安曇族の芸能と

いう発想に影響されてい

る。

また、植木行宣はこの

ように述べる。⁽¹⁶⁾

細男は石清水がその

一本拠であった。た

だしそれを田楽その他とセットにするのは、春日若宮祭をはじめ南都にみる形式であり、管見の限り京中にその例をみない。

本稿は植木行宣の「祭礼芸能の構成のうえで、王の舞・獅子・田楽の

形式、さらにそれに細男をくわえた形式は中世前期に展開したものであ

る。」という見解に立つ。細男を平安末より中世初期、京都・奈良の大寺

社の神事芸能で成立した一連の芸能構成の一つとして位置づける視点を

もつ。この点で植木の京中を重要視しない発言には疑問があるが石清水

八幡宮と南都に注目するところは賛成である。

ところで、中世史研究では、「殺生禁断」が中世の支配イデオロギー

の機能を果たし、石清水八幡宮の放生会が荘園制的イデオロギー支配の

みならず、荘園・公領を合わせた領域支配全体のイデオロギーに拡大し

たという説がある。⁽¹⁷⁾そして、石清水八幡宮はそれを国家レベルで具現し

たもので、「殺生禁断」規制の頂点に位置づけられた。応永二〇年（一

四一三）「和間濱放生會法用場莊嚴并假屋注文」⁽¹⁸⁾に描かれた宇佐八幡頓

宮市場における「殺生禁断札」図1は、それを視覚的に物語っている。

それに対して、桜井好郎のように宇佐放生会を仏教や支配イデオロギ

ーと直結せず、それとは拮抗する別な観念の次元で把握しようとする精

神史的考察もある。⁽¹⁹⁾

細男の発生や源流よりもその伝播や展開を考える必要がある現在、以

上のような視点よりの考察が必要であるのはいうまでもない。しかし、

八幡宮放生会を介して細男が伝播したのは九州においてである。石清水

八幡宮の細男が放生会に登場したのではないことにも象徴されているよ

疫神、号ニ御霊会。依ニ天下疾疫也。是日以前。神殿三宇。遂垣等。木工寮修理職所造也。又御輿内匠寮造之。京中上下多以集ニ会此社。号ニ之今宮。」と船岡山北麓の紫野に新しく神殿を造営し今宮社としたのが創始

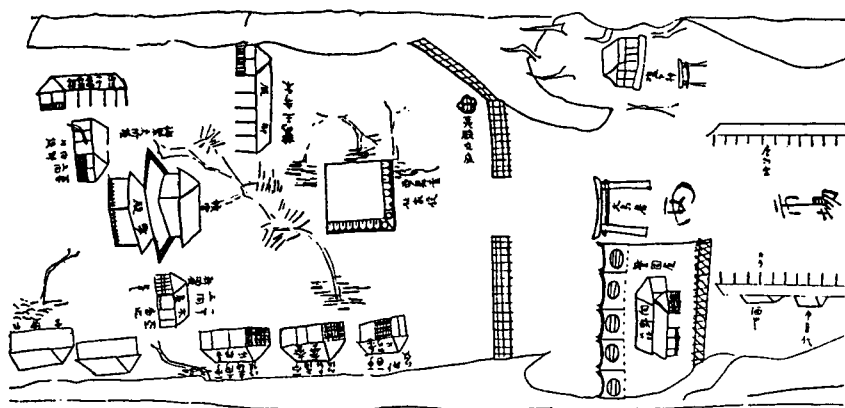


図1 応永20年(1413)「和間濱放生會

うに近畿における細男の系譜は謎である。

何れにしても、細男を北九州の八幡宮や放生会から一度解き放ち、その全体像を見つめ直すことが今、求められている。

一 近畿の細男

(一) 京中の細男

今宮社は『日本紀略』正暦五年(九九四)六月二七日条に「為ニ疫神ニ修ニ御霊会。木工寮修理職造ニ神輿ニ基。安置北野船岡山。」と御霊会が行なわれ、同長保三年(一〇〇二)五月九日条「於ニ紫野ニ祭ニ



図2 『年中行事絵巻』巻九

である。『日本紀略』寛弘二年(一〇〇五)五月九日条に「紫野御霊会也。東西二京條坊十列細男已有其数」、同書寛弘五年(一〇〇八)五月九日条には「紫野御霊会也。諸司諸衙調ニ神供東遊走馬十列等」参向」とあり、

御霊会に競馬・十列・東遊・細男の芸能が演じられた。

『栄華物語』二四卷「若枝巻」にも御霊会の細男が描写される。この巻あたりの成立は一〇三〇年前後とされており、流布本に「御霊会の細男 手のごひして、かほかくしたる」とあり、異本である富岡乙本『異本栄華物語』古典文庫に「ごさめのほそおのうたないしく、かほかくしたる心ちするに」とある。井浦芳一は両者を合わせて「御霊会の細男の打並びて顔隠したる心地するに」と解し、細男が打ち並び、居並んだ顔を隠す女房と解釈している。⁽²⁰⁾

一二世紀後半の成立の『年中行事絵巻』には祇園御霊会が描かれている。巻九は六月一四日の還幸における列見所より祇園社への渡御を描く。八王子の神輿の後に図2の駒形神人と細男の一行(五人)が描かれる。これは鼓・銅拍子・笛・笙・笏拍子の構成であり、祇園御霊会の細男は田楽・獅子舞とともに参加していた。

(二) 東大寺八幡宮の細男

東大寺八幡、現手向山八幡宮は東大寺の鎮守であり、天平勝宝元年(七四九)宇佐八幡の神助によって東大寺仏の鑄造がなったことから、大仏の守護神として宇佐八幡を勧請した。神社の祭礼である礪礎会は勅祭で、手掻会・転害会とも称し、⁽²¹⁾天文八年(一五三九)『転害会』⁽²²⁾に「鼓坂(転害門付近―福原註)ヨリ伶人御迎ニテ還御ナル事御影向ノ時ノ儀式ニテ」とあるように八幡神を宇佐から影向勧請した行列を再現したものである。一条大路に面した東大寺佐保寺門が御旅所となり、同門は転

害門と称されるようになった。祭礼は九月三日で嘉元二年(一三〇四)の『官宜旨』には、当日は畿内と伊賀の六ヶ国で殺生は禁断と記され、『東大寺八幡宮縁起』にも八幡神東大寺影向の時、その影向路の殺生が禁断されたとある。永仁二年(一二九四)成立の『東大寺八幡験記』によると「一説云、放生会と転害会、名異意同也」とあり、中世には手掻会は放生会であるという解釈もあった。転害会の執行は古代においては東大寺が主体になり『東大寺要録』に寛平年中(八八九〜八九八)の年中節会支度がこのように記されている。

史料 1

一、九月用

三日八幡宮祭 二石七斗御供 在「支度」 六石 上下司馬頭例給祈
一石八斗二升三合左右相撲饗 在「支度」
(中略)

一段 同樂祈 十段 相撲十番祈 十段競馬廿人袴祈
二段騎馬頭二人祈 四段行列使二人祈 厭舞二人
終舞二人一石二斗 各三斗 一石六斗相撲長八人 各三斗

細男は騎馬・相撲・競馬・厭舞・終舞と共に演じられている。転害会は一三世紀後半になると、祭礼費用を経済的に成長しつつあった郷民に負担させ、荘園の荘役と有徳郷民の頭役の両費用を中心に運営されるようになった。細男頭人の行事は、宵宮祭で神社に参営すること、神輿還幸の祭細男から幣を受け取り拝殿に供えること、料足を細男に渡すことくらいであり、頭人は多額の負担にも関わらず活躍の場は少な



図3 『八幡宮七僧法会御祭日式』(東大寺図書館蔵)
『体系日本歴史と芸能四 中世の祭礼』より

った。

祭礼は神事と賑神行事に分かれ、神事には八幡宮の神主と神人が会行事の命に従ってあたり、賑神行事は檢校を上首として一四人の頭役が差定されてこれを催行した。この頭人は、上司・下司・細男・法施(二人)・楚駒(其駒)・相撲(四人)・御輿所(二人)・騎兵(二人)である。

前述したようにこの頭役には室町中期頃から東大寺郷の有徳人が差定されるようになった。転害会全般を統轄する会行事は寺僧のなから任命された。八幡宮では神主の他、檢校を主座とする一八人の神人が役人となり、会行事の命令に従った。

永正二年(一五〇五)『転害会記』⁽²³⁾に

一相撲并細男、兼日仁相触事者檢校役也。会行事方加下知。則檢

校ニ申付之間、加下知ニ候由注進者也。則各勤其役也。

とあるように細男は主座の檢校が担当する役であった。

九月二日に朝廷から勅使が出発し、同夜宵宮祭が行われ田楽や細男舞が奉納される。当日早暁から北廊で七僧法会が行なわれ、のち行列がでる。『東大寺雜集録』⁽²⁴⁾にはその行列が記されている。細男は乗馬の檢校三人図3である。

行列の道順は、神社から大仏殿、中門前では門内に入らず諸職は悉く下馬して三基の神輿を迎え、神輿を大仏殿に向け一同礼拝する。のち、南大門では胡床を立て神輿を北向きに引き据える。のち、国分門(不開門)に至り、供奉の人々が下馬し、「御休息之儀」が行われ、「外居膳」

が供えられる。門前では細男舞が行なわれる。図4行列は中御門の四至を廻って転害門に到着する。転害門では楽人が乱声（舞の出の舞楽）を奏し、神輿着御之式が行われ第一の神輿を石壇の中央に、第二の神輿を南方に、第三の神輿を北方にそれぞれ西向に奉安する。神輿が手搔門に渡御している間神供・祭式・舞楽が行なわれる。のち、伶人の御迎えで

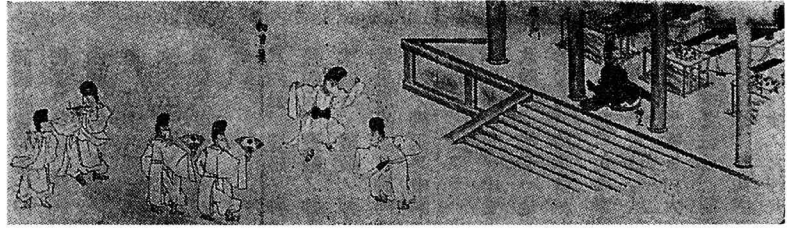


図4 『転害会図絵』（手向山八幡宮蔵）



図5 『転害会図絵』（手向山八幡宮蔵）

慶雲楽奏のなか転害門を東に進み、鼓坂を登って大仏殿裏の西室辺りから大仏殿西廻廊、馬場を経て八幡宮に還幸する。還幸のときも再び大仏殿中門前で三基の神輿を大仏殿に向ける。神輿は八幡宮拝殿に西向きに着御し、勅使と寺務は楼門の石階の下に蹲居する。のち、神輿を幣殿に奉安して、勅使は北御廊に、寺務は南御廊に着座する。のち、楼門の中央に畳一畳敷いて座を設け、神輿が安置され神事や賑神行事が行なわれた。

長禄元年（一四五七）『転害会日記』や同年『東大寺八幡宮祭礼目録』にはヒノ使い・舞楽・細男の舞・相撲が記されている。翌日にも後宴があり田楽が演じられた。

安永五年（一七七六）八幡宮権神主紀延興が写した『転害会図絵』²⁵ 図4・5によると、覆面がマスク状になっており、鼓二名、笛二名、唄二名の構成であった。

(二) 春日若宮祭礼の細男

春日若宮祭礼は興福寺大衆が藤原氏氏長者主宰の春日祭に對抗するために保延二年（一一三六）九月一七日に始行したものである。『若宮祭禮記』には保延二年に一物五騎、村二、田楽二村、競馬一〇番、流鏑馬一〇騎、相撲、勝負舞（舞楽）の参勤が記されている。この村は「僧正御房 御童児三郎座頭 搜松房律師御房印□」とある。翌三、四、五、六年、永治元年には「細男」、久安元年には「細男一村」、久安二年「細男二村」、仁平元年「細男」と一二世紀前半

には細男はほぼ参勤しているとみてよからう。保延二年の村は細男であり、一乗院玄覺が勤仕していた。⁽²⁶⁾

中世に入ると細男の頭役勤仕は郷民に宛てられた。『興福寺年中行事』弘長元年（一二六一）七月一日の「若宮御祭諸廻請等事」に「細男頭七郷内二郷合巡勤」とあり、南大門郷、新薬師寺郷、東御門郷、北御門郷、穴口門郷、西御門郷、不開門郷の興福寺別当郷（寺門郷）である興福寺七郷より二郷宛の巡役であった。

『弘安六年（一二八三）福原註』臨時祭記録⁽²⁸⁾には細男は鼓の禪勝房、笙の信乃公、笛の宗順房、銅拍子の宗仙房の構成が記されている。

現在の祭礼でも御旅所において細男が演じられる。⁽²⁹⁾ 全員後向きになり覆面をつけ、神座に向かい、笛二人は左隅に、右隅より鼓二人・袖二人が立ち、覆面着用後笛二人は前向、鼓二人・袖二人はともに後向きで立つ。舞は左の袖を三回、ノット（進んだのち後退りすることをノットという）三回、左手で鼓を押さえ右手で一手打をする。ノット三回（進む時は片手打で、退く時はチャンポン、チャンポン、チャンの五打、計一五打）、右袖三回、ノット三回、鼓三回、ノット三回、両袖三回、ノット三回、鼓三回、ノット三回（進む時は前と同じ一手打。退く時は右脚を引き一回五打、更に左脚を引き五打、重ねて右脚を引き五打。これを三回繰り返すから計四五打）である。広瀬家には次のような詞章が伝来している。⁽³⁰⁾

史料 2

（本舞）

靱負へる伴鼓取れ、太刀佩ける伴笛取らし、はや打て鼓とう／＼と、はや吹けや笛音もさやに、いざ立舞はむ身を細み、せいなの舞、こ

の舞を、おほ幸ありや、おほ幸ありや、吾が所よりほかにはあらぬまじ、この舞人にな見せそまじ、この舞人にな見せそ、おほ幸ありや、おほ幸ありや、吾この宝ほかにはやらじまじ、この舞たれや舞ふまじ、この舞たれや舞ふ。あなう昔のこの舞や、あなう昔のこの舞や、おほ幸ありや、おほ幸ありや、吾この宝ほかにはやらじ。

（豊姫）

（磯良）

たれしの神にてさむらふ。名のらせさむらへ、聞かまほしくさむらふ。あはれ、吾は御心筑紫の志珂の嶋に坐す神、名は安曇の磯良にて候。さ宣はす神の御名こそ聞かまほしくさむらへ、名のらせさむらへ。

（豊姫）

（磯良）

吾は豊の真耀くあかの御許のいただきに坐す神、名は豊姫の神なり。あなかしこ、しか貴き神とは知らずてさむらふ、いやなき業許しさむらへ、あか照るこの御宝は綿津見の神の御宝にてさむらふ、すなはち姫神に参らせむにてさむらふ、いざ納めさむらへ。

（末舞）

潮満つる珠潮干る珠、みつゑこの珠、この珠は白金黄金日耀く宝の国を須ろはす、みつゑこの珠みつゑ珠、おほ幸ありや、おほ幸ありや、あなにやしあみつゑこの珠、この珠こそは、国の鎮珠、御代の鎮珠、鎮めみつゑ珠、おほ幸ありや、おほ幸ありや、吾がこの所よりほかにはやらじ、みつゑこの珠。

本舞と末舞が磯良舞であり、その間に豊姫と磯良の問答が挿入されている。

『春日大宮若宮御祭禮圖』には細男について、このように記されている。

細男六人神楽舞奏之^{立鳥帽子 白張} 敷

二人座して笛をふく二人覆面を垂れ腰に鼓を付片手にて打ながら立



図6 『春日大宮若宮御祭禮圖』

出て跡さまに退き座す又二人ふくめんを垂れ右の袖を掩て立替り立
立出跡さまに退く二三反如此

一細男六騎 白御幣二本 素襖着二人^{大宿所}出る 白張立烏帽子同壇下

にて馬上笛鼓の藝能あり当国所々ニ居住す(中略)是神功皇后の
御時磯良の故事のよし藝能神前ニくハシ山城国離宮八幡社壇の左
右に冠きたる人形の顔手の付たる板あり細男と云よし

松の下 の儀や南大門交名の儀においも短い芸を披露したことがわかる。
春日若宮祭礼の細男は元来広瀬・五十鈴・秋篠・上司の四家より六人が
勤仕してきたのであるが、現在は広瀬・上司の二家になっている。⁽³¹⁾

享保一四年(一七二九)四月二日付の春日祭礼装束修履金願書願に
よると、当時の細男は、式上郡三輪村身浪重右衛門、三輪村内馬場村宮
生甚右衛門、同郡穴師村宮生出雲、山辺郡上之条村上司庄太夫、広瀬郡
広瀬村広瀬太右衛門、同村広瀬八郎右衛門であった。そのなかでも、穴
師村組頭宮生河内と上之庄村組頭上司庄太夫は宝永五年(一七〇八)二
月二九日付の「細男装束下着道具之書付」⁽³²⁾において、奉行所に烏帽子六
頭、笛二管、鼓二管を申し出ている。細男は自らを「春日御神役人」
「春日役人」と称しているが、奉行所からの扶持はわずかであったらし
く、大宿所において願主人の賄米の内から少々扶持されたりしている。
さて、上司家には近世中期の成立と思われる細男の由緒に関する史料
が二点伝来している。一点は細男由来書⁽³⁵⁾である。

史料 3

細男之事

神功皇后、武内大臣ト相談シ給ヒテ、新羅ヲウタントヲボシメシテ、筑紫御下向ノトキ、老人出迎テ皇后ノ供奉仕、道ニテ老人申ケルハ、是ヨリ西シカマノ浦ト申所ニイソラト申者アリ、此ノ童ヲメシテ竜宮ヘツカハシ千珠満珠ノ二ツノ玉ヲカリ給テ、異国ヲシタカヘマシマサン事安キ御コト也ト申、其時皇后仰ケルハ、件ノ童ヲ何トシテメスヘキソト曰、老翁申サク、セイナウト申舞ヲアイシ侍ル者也、此舞ヲ奈良舞トモ申也、カノ舞タレカ舞ヘキヤト仰ケレハ、此老人舞申也ト申テ、海中ニ舞台ヲカマヘ此翁舞也、此舞台石トヤ申テ于今其所ニ有之、其時カノ井ソラ海中埒出ケリ、イソラ面顔ニ貝カラニ付テアリケルヲハツカシク思テ、フクメンタレタリ、イソラモトモニマヒケルヲ今ノ細男トハ是ガコトノモトナリ

此老人ハ住吉大明神也ト、千珠満珠ノ玉ライソラ竜宮ヨリ取リテ神功皇后ヘ奉リケレハ、ヤカテ異国ヲタイシ給ヒテ天下泰平国土安穩五穀成就ニシテ日出度キコトノモトナリ、故ニ神事祭礼ニハ必此細男ハアルコトナリ

月 日

史料 4

乍恐奉申上候

春日神人細男六人之者共

一 私共先祖之儀御尋被成奉申上候

私共先祖之儀者

春日大明神河内平岡より三笠山へ御鎮座比〔虫損〕御跡慕ひ供奉仕候、其比

春日水茶やより来茶を出し三日ノ間養を受候、右之由然ルニ染延二年九月、春日若宮御祭礼御執行之節より、私共先祖御当地罷出御祭礼ニ相動候由、其後何方〔虫損〕召被出候と申儀無之、唯例式ニ罷出相動候哉、尤御鎮座之節御跡慕ひ候任例、御祭礼之節も私共障泥なしニ馬乗致御旅所江渡り、私共六人江者春日水茶屋より於于今〔虫損〕茶を出し申候、其上明神前ニ奉奏舞を候、尤私共先祖之儀御鎮座ノ後如何様ニ被仰付、何方ニ住居仕罷在候者哉、住古之書物等者百年已前私共仲間之内、宮生金五〔虫損〕甚右衛門ト申者年預ニ而諸書物相願罷在候処、火難逢焼失仕相知不申候、私共当時当国之内〔虫損〕々々ニ住居御罷在候〔後欠〕

細男の先祖に関する言上書であるが、細男は若宮祭礼創始の保延二年より参動していることは『春日若宮祭禮記』にみた通りである。春日大明神が枚岡より三笠山へ鎮座し、三日間滞在した時、跡を慕ってやって来て、春日水茶屋より来茶の接待を受けた。その由緒で、当時も春日若宮祭礼において、細男仲間に茶が出されるという。細男と春日水茶屋との繋がり示す伝承である。この水茶屋は、水谷社（水屋社）だと思われ、春日称宜の演能集団と深い関係がある。上之庄村の細男は現天理市の布瑠社（石上社）の御田植神事にも勤仕していた。延享三年（一七四六）の「布瑠社神斎集乾」には、一五日の御田植神事に「せいなふ料」とある。また、延享五年「布瑠社神斎集坤」によると、請雨祈禱の神事の際、雨降りのお礼の祭行列の三三番目に「せいなふ馬拾騎」が渡御する。

細男仲間居住地と春日社との関係を考えてみよう。広瀬・五十鈴家は広瀬村に居住して広瀬神社の社家である。広瀬と春日の関係は『春日社

家日記「中臣祐重記」養和二年(一一八二)に「広瀬御供」、同「祐定記」寛喜二年(一一三二)正月八日条に「広瀬新庄御節供」とある春日社領広瀬庄・広瀬新庄にその淵源が求められよう。秋篠家は桜井市穴師の穴師坐兵主神社の社家である。穴師郷には平安中期ころから、春日・興福寺の勢力が及び、兵主神社は春日社の摂社の地位にあった。⁽³⁷⁾上司家は上条村(現天理市二階堂上之庄町)に居住する。応永六年(一三九九)の「興福寺造営段米田数帳」(『春日神社文書』)によると、当地に比定される星川庄は興福寺一乗院領荘園であったことがわかる。三輪神社の膝元である三輪村も弘安六年(一一八三)の「談義衆中書状案」(『春日神社文書』)によると春日社談義料所であり、先述した「興福寺造営段米田数帳」より興福寺大乘院料荘園であったことがわかる。六人の細男は二家ずつ年預の役があったらしく、先述した衣装書立においては、組頭の二人、宮生金五⁽³⁸⁾と⁽³⁹⁾甚右衛門が年預であったことがわかる。

若宮祭礼の細男は祭始行の保延二年より巫女・十烈・一物・田楽・競馬・流鏑馬・相撲・舞楽、翌年には使(日使と思われる)・東舞が加わった一連の芸能構成の一つであった。この時期の細男の芸態はわからないが現在の磯良と豊姫の詞章と芸態は、宇佐からの伝播だと思われる。それ以前の古歌謡を連想させる史料がある。慶長一六年(一六一一)の奥書がある能伝書『幸正能口伝書』⁽³⁸⁾に狂言が演じる「せいなう」に関する記事である。

一、せいなうと云事あり。ふく面ヲたれて舞申候。是も又、狂言大鼓持て、はやしてまい申候。哥ひへ、「我が宮の、宮の二はよ

り若草へ、むすぶ計、いざきりぐすころもかへさん、く、
 是をうたふ。まいニ、小鼓へ、たつくととく。打上ハ常
 のごとく也。一返まいて、狂言一返まはりて、狂言も小まはり
 して、とめ申候時、打上也。

田口和夫はこの記事を狂言が神事芸能において実際に細男の相手役となったといひ、天野文雄もこの説を補強する史料として、金春座が江戸前期若宮祭に参動した際の見聞を記した金春元信の『八郎殿書付翁』をあげている。⁽⁴⁰⁾そこには「せいのふ渡りに云事」として『幸正能口伝諸書』と同じ詞章の謡物が記されており、『八郎殿書付翁』の一通が春日若宮祭の翁猿楽の詞章を記していることも併せて「せいのふ渡り」も春日若宮祭の細男と解釈している。⁽⁴¹⁾天野は同様の狂言の細男詞章を吉備津神社の神楽歌に指摘しており、この詞章は神事芸能の神楽との交渉もみえる古歌謡で現在の八幡系の歌謡以前のものと思われる。

(四) 大鳥神社の細男

和泉国一宮である『大鳥神社流記帳』⁽⁴²⁾は延喜二二年四月五日の奥付をもつが、内容的には平安末から鎌倉の様子を記すものである。

史料 5

濱貳浦四季御贅料

葦田浦

高磯浦九月宣言御放生料

(中略)

毎年四月七日御祭一日、但御花揃在花園一所、字

既原、是國內人民等奉仕之中、日根參簡郡、依巡々

者、十烈預、細男預田樂并參種預差定御供預、大樂

兩色預、差定大鳥郡、

六月廿六日御被戸 在葦田浦

日根・和泉・大鳥三郡に十列・細男・田樂・御供頭・兩色頭が差定されている。この流記の撰定に関わったのは検校・別当の神宮寺（神鳳寺）僧官と神主・禰宜・職事の神職でいずれも大鳥氏であり、頭役差定は大鳥氏によるものであらう。例祭は往古より八月一三日、放生会である。流記帳には放生料の浦や六月の御被戸の浦も記され、細男伝播に放生会を想定することもできよう。特殊神事としては、四月一三日の花摘祭があり、往時は浜寺公園の御旅所への神饌渡御があり、堺の乳守遊廓より花摘女が供奉し、花笠を着け、花車をひき、花籠を神前に供えたという。現在は花笠を着けた稚児三〇人程が行列を組み、花車一台が出て、本社（44）の神前に花籠一〇台を供えて参拝する習わしとなっている。史料上の既原の花園が花摘祭のための花園である。四季御費料として「高磯浦」「葦田浦」があり、これは放生会のための浦である。

(五) 法隆寺の細男

中世、法隆寺東・西両郷は刀禰・職事を中心にして自治組織を形成し、郷として発達した。建武二年（一三三五）には刀禰五人、職事一人がみえる。両郷には大行事という祭祀組織の長があり、神社の運営に大きな権限をもっていた。（46）

貞治五年（一二六六）『寺要日記』（47）によると、法隆寺鎮守の祭には、年三回細男が登場する。

まず、六月四日の総社の祭である。総社明神は明治二年に斑鳩神社へ遷祀されるまで寺の西北にあって三十余所大明神とも称していた。この祭は六月会と称され、当日舍利講の後、総社拝殿において行なわれた。祭には猿楽・田樂・神樂・細男が演ぜられたことが、禄物書上よりわかる。

細男の禄分一二斗五升は目代の沙汰であった。細男の芸能者について『寺要日記』には記されないが、猿楽は坂戸座で楽頭は長谷弥勒大夫―左衛門大夫―金壽大夫と相伝してきた。田樂は往古寺住の田樂法師の役として勤仕してきたが、近年難儀となったため満寺評定により、田樂楽頭職を坂戸の袈裟大夫に与えた。元応二年（一三二〇）六月四日以来袈裟大夫が参動したが、彼の死去の後甥の色石大夫が参動し、延元元年（一三三六）三経院談義の評定により色石大夫に楽頭職を与えたという。八月二三日は鎮守天満社の御霊会である。『寺要日記』によると、興福寺住の別当湛照僧都が天慶年中に長吏に任ぜられ、彼が菅原氏の苗裔であった由緒より天満宮を創始したと記されている。この御霊会には神南庄の頭人と東西両郷の頭人が舗設したようである。

八月一日に法隆寺領神南庄の頭人に御霊会の「櫛差」があり、神主一人、堂童児一人で差定にいく。櫛を持って庄のなかを巡に廻って当て、恐らく頭人宅に櫛を差し、同家で饗応がある。

二一日夜は、中小路夜宮といって、井ノ辻より西南北、西ノ辻より東

分在家が寄り合う。

一二日夜は、各々天満神社に御神楽、御花米、散米、酒などを進上する。以前は、御霊社に常駐（付属）の巫に進上していたが、暦応年中（二三三八〜四二）頃より神主が取るようになった。神主は寶光院である。

二三日、先ず神主と堂童児五人が神社に参り、神主の祝詞の後、開扉、堂童児の二藤が神像を御輿へ入れ、堂童児が昇く。扉橋に入る時、鐘を撞き、東大門前北脇に据え、暫く駐輦する。その間に東大門へ大衆が出仕し、これはその近辺の寺僧の役である。東郷の結衆は東大門の南脇に悉く蹲居する。田楽衆は全員で当時定型化していた刀玉（昔は「式々庭立」）を行い、高足もあった―庭立は平安期に天皇が政務を聴く宮中儀礼の後、奏された庭立楽から田楽の演目になったものであろう―を演ずる。その間に馬上の巫が金光院より儀礼の場に出る。その後、御輿は福井前を南へ入り、巫・神主・競馬・田楽が共をする。結衆は東大門を入って、「東郷假屋」へ入る。御輿は南大門より入り、もし中門に裏頭出仕者が居なかったら南大門で駐輦する。中門に裏頭大衆が三人出仕していたら、御輿を中門に入れる。乗馬の巫が中門に渡り入ってのち、田楽が「中門口」を打ち入って着座する。次に細男が遊ぶ。終わると急いで慶賀門より廻り入って、中門内の御輿の西浦に蹲居する。轉供の衆（五常衆急）を吹き、鼓で拍子を打つ。次に御輿へ轉供がある。次に神主の祝（のつと）を申す。次に競馬役人（別当・小別当）が直垂を着て乗馬し、新堂北浦より東へ三番ずつ走る。次に田楽庭立衆。次に猿楽式三番。次に相

撲一〇番あり、東西両郷より交名をしてから取る。猿楽の式三番が終わると還御する。塔（東）金堂の間、北東へ脇門より東室北浦、食堂北浦、北御門を経て本社へ帰る。これは神主・堂童児の役である。その後酒盛りでおわる。細男の禄分下行は、三斗三升が寺納、纏頭物の一斗七升も寺納で、維那の沙汰。細男の料田は二反の前田垣内の内、一反は北室、一反は西円堂三昧供田である。天満神社御霊会の細男は「遊ぶ」と表現されている。細男は巫渡り・田楽・競馬・猿楽・相撲という一連の芸能構成に組み込まれていた。東郷の結衆は惣結衆と思われる。その傍証として三里と称する五百井・服部・丹後の結衆は惣結衆であり、その内の有力者がオトナとなり竜田会を精神的紐帯としていたことがあげられる。（例えば、大方家文書、天文二年（一五五三）「ミサトハツカウヲキテノ事（三里八講掟の事）」⁽⁴⁸⁾参照。）東西両郷にも惣が発達していたと考えられ、本年は東の結衆が御霊会を勤仕していたのであろう。

九月一三日は法隆寺西南に鎮座する竜田神社（竜田新宮）の祭で竜田会とも称す。中世には法隆寺支配の市とし、竜田市が生まれ、この市神として、寛元元年（一二四三）竜田新宮西方に西宮広田社の夷神を勧請、その際、法隆寺東西両郷の郷民が猿楽を演じ、のち東西両郷が隔年交代で奉仕するに至った。⁽⁴⁹⁾竜田神社の神職には法隆寺僧があたり竜田神人⁽⁵⁰⁾とよばれた。竜田・夷両社祭礼には両郷および前述した三里の村人らによって猿楽・田楽が演じられ、三里には三里八講という竜田会に奉仕する講が組織されていた。⁽⁵¹⁾

『寺要日記』より竜田会を見ていこう。竜田会の場合も舗設の春頭役

として餅舁の頭役がある。「法施假屋」は東西両郷に「宗別役」即ち棟別銭が課せられていた。

当日は堂童児の集会鐘で竜田社へ社参する。拜殿には請僧東座一藤が着き、次々随意に着く。大皆西座二藤以下随意に着く。楼門西は三里假屋、東は安堵假屋、東方は神主が富川假屋に、西方は大行事と寄人という配置である。御輿が入り、東は獅子・御鉾持・御輿・富河神主の順で渡る。西は王舞・御輿・立野神主・寄人・巫が渡る。次に細男、田楽中門口が演ぜられ、次轉供がある。次細男が五常楽急で演ぜられ、太鼓を打ち、次に立野神主が祝(のつと)を申し、次巫が皆参る。高座を立ち、誦讀三礼、高座に登り、唄以四ヶ法用、表白、神分などが続く。

竜田会では細男が五常楽(平帳・新楽・中曲。平舞・向立・舞人四人)の急が奏されるなかで演ぜられる。そうすると、前述した御霊会で、轉供の楽(五常楽急)を吹き、鼓で拍子を打ったのも細男であることが推測される。

法隆寺の細男は、一四世紀に総社明神・天満神社・竜田神社の祭礼において演ぜられ、伶人(多分南都楽所)によって演ぜられたものと思われる。

(六) 南山城宇治田原三社祭の細男

京都府綴喜郡宇治田原の祭を三社祭という。⁽⁵²⁾宇治三社の大宮は大字荒木にあり氏子区域は荒木及び郷の口。一の宮は宇治田原の総社(一説に八幡宮)とよばれ名村に鎮座し、氏子は田原南地区と岩山。三の宮は平

岡にあり氏子は立川である。田原郷の郷祭である田原祭は奥山田・禪定寺以外の田原郷(庄)の宮座の行事であり、三社の神輿が九月一日に山滝寺大御堂に集まり神事を行なう。山滝寺は、『禪定寺文書』文永九年(一二七二)一〇月付「山城国山滝寺雜掌訴状」に宇治平等院の末寺と記されている。本寺の大御堂は田原祭の御旅所で、これは正安年中(一二九九―一三〇二)からのことも伝える。文龜年間(一五〇一―一五〇四)以前は、九月九日にも久世郡境にある三郷山麓の轡池まで、田原郷の神輿が出向き、久世郡の殖栗郷および羽栗郷二郷の社である双栗神社(現久御山町)の神輿と出合い、三郷祭と称する神事を行なっていたという。双栗神社は江戸時代榎本八幡宮と呼ばれ延宝四年(一六七六)の同社縁起にこのようにある。天治二年(一一二五)この地に大きな榎の木があって、鳩峰(石清水八幡宮の男山)より毎夜金色の光りがさし、この木の梢を照らした。その後、この木のもとへ八幡宮を勧請すれば我は庶民を守ると託宣があり、神祠を造った。仁平二年(一一二五)如一が八幡宮の神輿の神体を作って以来、三郷山への渡御が始まった。三郷祭が文龜年間に中止されて以後は郷の口の地に御旅所(新宮殿)を建て、九月九日にこの御旅所で神事を執行する。明治維新以降大御堂がなくなつてから御旅所のみで簡略化した祭となった。

三つの社には、それぞれ宮座が構成されており、時代による変化はあるが、

大宮(荒木一族座・荒木本座・荒木新座・八幡座・声翁座・王鼻座)

一宮（岩本・南の侍衆八座名なし）・南本座・南新座・公文座・田
楽座・岩本平座・獅子座）

三宮（殿座・大道寺座・四村新座）

などがあり、座の性格からいうと一族座（田原一族座と荒木一族座）と舞物座にわかれる。後者は声納座、王鼻座、田楽座、獅子座の四座で、三社祭に奉仕する芸能の名称がそのまま座の名前になっている。八幡座は競馬を勤仕する座である。現在の祭は一〇月一七日で、一〇月一四日に三社の神輿が御旅所まで神幸し、仮宮に鎮座する。一七日には一旅座の内九座が三組ずつの組をつくり、それぞれが三回ずつ、北から南へ馬駆けを行なう。計九回がすむと神前で舞物座による舞物が行なわれる。

声納は声納座より出た一人の役がこれにあたる。衣裳は黒烏帽子に白衣、白袴をつけ、翁の面を被り、白足袋に下駄をはく。左手で小鼓をもって右肩に担ぎ、これをうちながら右まわりにまわる。一回転すると神前にむかって頭をさげ、再び同じ動作を繰り返して、計三回まわって終わる。昭和十五年の「田原祭座中名簿」によると、「声納座 八名 休二。在所は郷ノ口のみ。」とあり、郷ノ口の八名が構成員であった。

井上頼寿が聞き留めた明治以前の日使の伝承は非常に興味深い。荒木座一族より出る日使二名は厳重な潔斎をし、額と両頬に紅点を打ち、祭では終日姿勢を端正に保ち、太陽に正面し太陽の移行に従って廻らねばならないという。伝説によると、太古に田原郷双栗岩本の大岩嶽へ双栗天神、建藤神社、湯原神社、大宮神社、一宮神社が降臨した時、荒木一族と田原一族が奉仕した謂われから、この二座は祭礼に際し神に何も

奉獻しない。⁽³⁵⁾

日使は東大寺手掻会、春日若宮祭礼、石清水・離宮八幡祭礼いずれも、細男とともに登場する。宇治田原の場合、細男・田楽・王舞・競馬・獅子舞・日使の構成である。特殊な役である日使は細男の成立を考える上で重要な指標になると思われるのである。

(七) 石清水・離宮八幡宮の細男

石清水八幡宮の四月三日の日使頭祭は寛元二年（一二四四）成立の『宮寺并極楽寺恒例仏神事惣次第』⁽³⁶⁾にこのように記されている。

史料 6

所々村細男、於南楼前尽舞曲、賜祿物^{山上堂}達取之、馬長等^{惣官并祠官已下、}所司等勤之、渡之後、祭使参宝前、次差定明年使、次退出、社務惣官已下三綱所司等宿院高坊着座、居供食、所々村并祭使渡之後、各退出、但惣官無出仕之時者、所司等着極楽寺礼堂行之

文永一二年（一二七五）成立の『八幡宮寺年中讃記』⁽³⁷⁾には四月三日の「御節會事」に「彼廻雪之細男乙訖而預祿」とあり、鎌倉期の細男の存在は明らかである。

ところで、内殿灯油を調達していた石清水神人が平安時代後期以降対岸の山崎を根拠に商業活動を始め、以後商圈を拡大し室町期を最盛期に九州から東海地方に活躍した。⁽³⁸⁾彼らは石清水八幡宮から得た様々な商業上の特権の代償として石清水八幡宮の重要な神事の一つである日使神事を勤めた。様々な地域の散在神人も日使頭役を勤仕した。頭人は籤によ

って決められる。『八幡愚童訓』乙本下巻「三不浄事」には

建治年中（一二七五〜七八）福原註一に四月三日の「日」使いにあたりし者、山門に身を入れて難渋しける程に、遂にまけて日使をつとめたりしか共、神事違例の各のがれがたかりしかば、程なく一家悉く病死にて其跡あら畠となり、財宝は他人の物となる。

とあり、日吉社神人と八幡神人の対立という背景はあろうが、頭役勤仕の恐ろしさを垣間見せる説話である。

貞和四年（一一三四）の『離宮八幡宮御遷座本紀』⁽⁶⁰⁾には日使神事の起源がこのように記されている。貞観元年（八五九）僧行教が宇佐から八幡神を奉じて山崎に來着し、同一八年瑞夢を感じて男山に遷し、遷座の四月三日右少將藤原山蔭を勅使として差遣した。以来、四月三日にはまづ山崎に差下され、官幣のち男山に参向する神事が行なわれたが、治承四年（一一八〇）の兵乱以後、神職神官が勅使少將の代わりとなって執行するようになったと伝えている。日使神事はこの起源説話の儀礼化であり、反復であった。

近世前期の成立『石清水離宮八幡宮御旧記』⁽⁶¹⁾には日使頭祭の次第が詳細に記されており、これを参考に祭を追ってみよう。

四月頭人方が一二間の松屋を設ける。

四月三日、松屋の上座に日使頭人が頭人の装束に太刀を帯び笏をもって着座する。頭人の次の座に惣長者が順次着座する。献酌、舞踏で松屋の頭人と惣長者が饗応される。そのあと、離宮八幡宮の神前に、社務、社司、俗別当、神主、大政所、惣長者、執行、案主、闕番、六位下、公

事足、まさりなど四八座の諸役人が進み出る。二一人の神楽座の勾當符生が拝殿に着座する。ついで、諸役人が百味の御供を運び渡しながら供える。一人の惣長者が神前に進んで先声し、大政所が拍子を合わせて神歌をうたう。蔵人司が大幣をとり、次第司に渡す。日使頭人がそれをうけ、拍手をうって奉幣する。拝殿の神楽座が神楽と舞楽を奏する。田楽座がささらや刀玉を演じ、乱曲の拍子をとって歌い舞う。ここで「又職掌人者笛を吹鼓をすり秘曲の躰おかしけれども忝も鹿嶋大明神の御振廻と申伝細男といふ有兩人形、是者武内高良之化身とし、此ニ神手打給へハ田殖早成之表示五穀成就の宝基也、」とあり、兩人形を打ち合わせる芸能がある。そのあと行列をととのえて五位川の祓殿へ向かう。交野の農民が先棒となり、鳥羽や木津などの馬長役、神子、舞人、次第司、蔵人司が先行する。祓殿では大神宮を拝し天地長久を祈る。神事奉行が役人の交名を読み上げ行列をととのえる。行列は大路を渡り松屋の前へ進む。松屋の前では日使頭人の内室が行列の銘々に酒を酌み、禄を配る。行列は大川に進み、花舟四八艘に乗り舞と楽のうちに橋本へ渡る。諸役人は花舟をおり、行儀をととのえて騎馬で男山の下宿院へ入る。日使頭人と供奉の諸役人は馬上で科手門に入って庭へ通る。そこには、諸国の人々が左右両側の棧敷から見物している。ここで「長者三人高坊に進ミ田殖の神秘、此時細男拍子を合せ田楽色々の秘曲在り、」と再び兩人形の神手打合わせがある。

明応四年（一四九五）の『八幡宮御遷座記并日使神事作法』にも細男人形の神手打が記されている。

史料7

交野土民為御先役、号須弥寺捧白杖、自鳥羽木津等村年頭馬長役御子舞人次第司藏人司先行色掌人吹笛打鼓、是者奈鹿嶋明神御振舞也、細男云有兩人形式内明神高良明神也、此兩神手打給者田植早成表事也、神事勤使者往古之勅使代也、於五位川押大神宮并北闕長者宿院、於高坊田植成業、檢非違使火長督馬等堅門、日使勤者長者御山迄騎馬、御殿外廊三返打廻、

また喜多村信節の『嬉遊笑覧』にはこのようにある。

史料8

○山崎離宮八幡の拜殿の内左右に長さ五尺餘の板にて作りたる人形冠着て首ばかりまる木にて彫たるが胴も手も板にて白くぬり膝の程より下は黒くぬりたり手の長さ四尺ばかりにして二ツあり背に綱をつけてこれを引ば手をあげさげするやうにしたり其體今童の手遊に板にて作れる熊と金太郎の相撲取かたありそれに似たる物なりこれ細男、とて祭儀に用るものといへり

信節は『筠庭雜考』に図7のような写生図を掲げ、この傀儡を神社衰微の頃舞人の姿を木彫りにしたものと解釈している。

二体の細男人形は武内・高良両神の化身であり、これを打ち合わせることは「鹿嶋大明神の御振廻」であり、それによって、稲霊が慰められた。細男は春祭で豊穰を招来する意味があったのではないか。武内・高良神は『宮寺縁事抄』巻一では八幡とも密接に繋がり、あるいは武内宿禰が八幡神の後見殿として本宮内殿に祀られたように八幡における特別な神であった。『宮寺縁事抄』第一末には、

史料9

三郎殿不動

百大夫同
寶殿内
八子毗沙門
武内阿弥陀

宇佐ニハ善神王
同宇佐
中樓左右之脇仁奉

立也、但以左号武内、孝元聖主四世之孫武雄心命第一之子也、自景行天皇之御宇黎

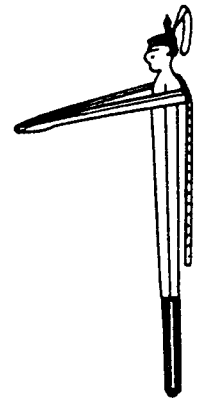


図7 離宮八幡宮の細男(『筠庭雜考』より)

と記される。宇佐八幡の中樓左右脇の善神王についてはわからないが、後述する九州杵原の善神王が傀儡で放生会に浜殿に祀られていたことからも、武内の傀儡神としての性格が窺われる。三郎殿や百太夫と傀儡との関係はすでに歴史のなかに埋没してしまったが、『宮寺并極楽寺恒例仏神事惣次第』や『八幡宮寺年中讃記』に記された鎌倉期の細男は傀儡戲であることは間違いないだろう。日使頭祭の細男は日使・田楽・馬長などの芸能構成の一つであるが、芸能は一貫して傀儡戲である。春日若宮祭礼・東大寺八幡・宇治田原などが人間芸細男であるのに対して、ここが傀儡芸である背景には特殊な歴史が想起されねばならぬであろう。

(八) 多武峰の細男

桜井市の南、御破裂山南腹の談山神社は、多武峰寺の中核である妙楽寺と精霊院とが対立を防ぐため、延長四年(九二六)惣社が建てられ談山権現の勅を賜ったことに始まる。

現在一〇月第二日曜の嘉吉祭に細男人形図8が供えられる。船橋文治は嘉吉祭の創始をこのように記している。⁽⁸²⁾ 永享一〇年(一四三八)八月

南朝の遺臣らが四條三位資行卿を擁し、多武峰により義兵を起こした
で、畠山持国がこれを討つため、大軍を率いて攻めた。社殿が兵火にあ
い、御神霊を一時飛鳥の橋寺に移した。嘉吉元年（一四四一）八月に遷
座し、九月に祭を行ったのが始めである。

『談山神社古文書』『多武峰年中行事』に九月一日の祭礼として「御
祭礼、四ヶ法用、講演、神供、伝供、伶人舞楽、神馬十疋、細男、相摸、
猿楽等様々、神拝アリ、検校三綱出仕等、在之皆出」とある。舞楽・神
馬十列・相撲・猿楽とともに登場する細男は傀儡と推定される。その根
拠としては、嘉吉祭に現在でも細男人形というよりも、神像のような細
男像を一番最初に供えるからである。吉川雅章が紹介した宝暦一三年⁽⁶³⁾
（一七六三）九月の『三番行事記』には、年間行事を担当する子院三番
による準備や式次第を記したものである。この付録に「祭祀傳供」の項
があり、傳供の前に奉幣と無垢人が記されている。宝暦年間には、細男



図8 細男像（多武峰談山神社蔵）

は無垢人という名に変わり、現在のような形となっている。「祭祀傳供」
の項には神前配置図が図示され「第二無垢人相向安鎮東西高麗狗前」と
記されている。無垢人は当時二つあり、東西の狛犬の前に置かれて相向
かい、それは安鎮のためである、と記されている。岩井宏實・日和祐樹
も、無垢人について「高さ四十センチくらいの浄衣姿の人形で、細男と
も呼ばれ先達の意味をもつ。もとは右方・左方の二組用いたといわれて
いる。」と記している。右方・左方に関しては、『紅葉拾遺』⁽⁶⁶⁾に

史料10

又按永正祭祀之例、左方鷺森^{在今、}神主、右方神名備森^{又名御神森、在}
^{井谷、}神主並

對承事、

とあり、『三番行事記』にも左方・右方の神達や白丁が記される。

多武峰の細男は、石清水・離宮八幡宮の日使頭人祭より伝播したもの
であろう。先述した「石清水離宮八幡宮御旧記」に離宮八幡宮の神前に
諸役人が百味の御供を運び渡しながら供え、諸芸能ののち細男の兩入形
の打ち合わせがある、と記されている。百味の御供と二体の細男人形及
び現在の細男人形図と『筠庭雜考』所載の細男の類似より、多武峰の細
男は日使祭の細男よりの伝播と考えられる

二 九州の細男

(一) 宇佐八幡宮の細男

平安期・鎌倉前期の宇佐八幡放生会については殆どわからない。『永

光文書「宇佐宮年中行事案」⁽⁶⁶⁾は大治三年(一二二七)以降平安末期の年中行事を記すが放生会はその存在が記されるのみである。放生会の実態がわかるのは、『宇佐宮寺年中行事』⁽⁶⁷⁾(宮寺年中行事と略す)であり、同書一〇月一三日の「弥勒会八講」に宇佐八幡領内の地頭が元寇の防備にことよせて神事所役を対捍していたことが見え、文永・弘安の役(一二六八〜一二八一)より隔たらず、一三世紀末期より一四世紀初期の成立と考えられる。後述する託宣集とはほぼ同じ成立時期であろう。

先ず宮寺年中行事をあげておこう。

史料11

八月一日放生会 和間浜屋形本立魔務付放生 自今日至十五日也

細男^{表異国降伏矣}
十五ヶ日同之

七日同屋形賦

十一日宮試楽 相撲十番称内取

十三日同和間屋形見

十四日神輿臨幸于和間頓宮、莊嚴宮寺役 祠官 庁内 檢非違使已下供奉神官

束帶 請僧百二十口^{寺家 請定 所司 袈裟 供僧 成業 長講同、甲 堂達 表衣、白袈}

菩薩師子寺役楽人伶人等列参鳥居前

子尅法華懺法 請僧二十口

同尅伝戒乞戒

丑尅神楽 神官 伶人

十五日寅一点 相撲十番 神官頓宮南庭座

卯尅自頓宮行幸于浮殿

(中略)

辰尅龍頭鷁首之船浮海上 奏音楽

同尅傀儡子之船同浮 而表異国征伐之古様矣

巳尅還幸于頓宮

午尅集会乱声 神官請僧等着幄屋

(中略)

申尅御驗奉向西 西舞台奏舞楽

酉尅還幸于本宮、(後略)

細男は一日より一五日まで「表異国降伏」して舞われたこと、一五日の傀儡子以外は人間の芸であったことを確認しておこう。

宇佐弥勒寺僧神叶によって正応三年(一二九〇)より正和二年(一二三三)にかけて編纂された『八幡宇佐宮御託宣集』⁽⁶⁸⁾一六卷(託宣集と略す)にも当時の放生会が反映している。

史料12

八月十四日大菩薩遷行和間浜。入御頓宮。当会为鉢。奇麗甚妙也。移九品淨刹之莊嚴。有廿五菩薩之舞楽。同夜有六根懺悔之行法。有伝戒乞戒之儀式。同十五日潮半満之時。大菩薩出御于浮殿。法蓮和尚等導師已下勤行。唱放生陀羅尼。令誦大乘經文。此間買放鱗貝生命。施与甚深法命。又表曩日之様。調今時之式。久々津舞出於幕中。左旋右旋。浮海上音々伎楽奏于船頭。龍頭鷁首飛浪間。又騎兵惣二百四十人。宮国各一百二十人。凶靈余執猶在。為令防此惡事也。又虚空藏等四箇寺。各徭三人。船一艘。駒犬二頭令調進。各々造進当寺飯堂。面々安置本仏影像鱗貝直米等郷々所立用也。此御船会訖令還御頓宮。

(中略)

自仏法者蕩惡人。自海水者浮龍頭。自地上者走駒犬。自虚空者飛鷁首矣。隼人等大驚甚惶。彼両国之内構七所之城。爰振仏法僧宝之威。各施大力。出二十八

部之衆令舞細男舞傀儡子之刻。隼人等依與宴忘敵心。自城中令見出之時。先五所城奴久良。幸原。神野。之賊等伐殺之。今二所城曾於乃石城。比亮乃城。之凶徒忽難殺之間。牛尾。志加牟。託宣。須限三年守殺衆賊左牟。神我礼相助此間荒振留奴等乎令伐殺女牟。者。爾時將軍等令請神道之教命。伐殺蜂起之隼人畢。

養老四年（七二〇）に八幡神が大隅・日向両国の隼人を討つべく託宣し、大神諸男に豊前国下毛郡野仲郷三角池に生えた真薦草で神験をつくれ、と靈告があった。諸男は池の薦を刈り取って神輿に乗せた。隼人征伐の際、海には龍頭が浮かび、地には駒犬が走り、空より鷓首が飛ぶという靈異が出現し、隼人を恐れさせ大神諸男を助けた。二十八部衆が細男（傀儡子舞）を舞わせると、隼人は興宴により敵心を忘れ、城より出てきたところを討殺したとある。託宣記にはその出典が「御放生会文」にあるという。これが鎌倉後期の儀礼を反映していることは神井自体が傀儡舞以下を「表曩日之様。調今時之式」と記していることから知られるが、今時の式（当時の放生会）では久々津舞で、中世における養老四年の神話叙述では「細男傀儡子舞」なのである。

放生会は徳治二年（一一三〇）より応永二七年（一四二〇）の中止後、足利將軍による室町初期に復活された。（69）山路興造によると、この復興に際し宇佐八幡宮に舞楽や奏楽を担う伶人や、神楽を舞う神官などばかりうじて存在したようであるが、傀儡をはじめ細男、獅子以下の諸芸能を演じる專業の芸能集団はすでに存在せず、放生会の芸能が八幡領内の郷民に所役として割り当てられた、という。この時期に該当する放生会史料として、享徳三年（一四五四）大宮司公弘編纂、寛永八年大宮司公仲

書写『宇佐宮齋會式』（70）（会式と略す）、『北和介文書』年未詳『八幡宇佐宮放生会縁起』（71）（放生会縁起と略す）、『宇佐宮現記』（72）などがあげられる。会式によって復興期における放生会をみてみよう。

六月末日御祓会では、行列を仕立てて頓宮となる和間浜に臨幸があり、頓宮で伶人が萬歳・地久・陵王・納會利を舞った後、細男があった。細男を勤めた小舎所行事は、「本司酒肴 米六斗者、自館内下行之、土器作手食 五斗、同自館内下行之」とある。

八月一日に和間浜に屋形を建て、この日より細男試楽があり、このように記される。

史料 13

一 細男試楽事

一日封戸辨分	二日兩辨分 <small>向野、革、</small>	三日辛島辨分
四日高家辨分	五日來繩辨分	六日野仲辨分
七日大家辨分	八日上毛辨分	九日兩辨分 <small>角田、大野、</small>
十日兩辨分 <small>津隈、勾金、</small>	十一日兩辨分 <small>田染、葛原、</small>	十二日
兩辨分 <small>檜、</small>	十三日兩辨分 <small>石垣、新開、</small>	十四日兩辨分
分 <small>貫、</small>	十五日安岐、武藏兩辨分	

夜別勤役

酒三斗三升

此内三升上分料、御杖人請、

燒米三斗三升、此内三升同前、

職掌、神人等各着座于大貳堂南庭、御杖人者東座西向、小舎所、本司等者西座東向、細男之鼓打、笛吹者北座南向、先御杖人備上分於棚上、辰巳角、則池端、

申^レ祝、御幣者其夜、次細男向^ニ于異^ニ舞之、次退出、通^ニ彌勒寺之後^ニ於^ニ百太夫殿、
埋^ニ事人頭^ニ自^ニ一日^ニ至^ニ十二日^ニ同前、十三日之夜者、稱^ニ二渡^ニ舞^ニ于七ヶ所、
凶土基殿、
大宮、若宮、下宮、大貳堂、女禰宜、宮司、百太夫殿、此内兩所^ニ宮司、者、
酒坏、祿在之、又細男兩人所^ニ垂^ニ于顔之布^ニ一切各^ニ尺^ニ者自^ニ館内^ニ被^ニ下之、次
十四日、號^ニ村渡^ニ小舍所行事之、本司爲前於^ニ七ヶ所^ニ舞之、御行以前、下^ニ
居細涼堂之前、稱^ニ御向樂^ニ吹^ニ笛打鼓、神輿御通之後者、乘馬烈^ニ于胡籥負之
前、次着^ニ于頓宮^ニ之、御鎮祝之後、於^ニ所々^ニ舞之、

経費は封戸一〇郷の弁分と角田以下の本御庄の弁分に賦課され、夜別に酒と焼き米が貢納された。大貳堂の南庭で舞い、御杖人は東座西向、小舍所本司等は西座東向、細男の鼓打ちと笛吹きは北座南向で座り、巽の池に設けた棚の上に酒と焼き米を供えて、巽に向かって細男を舞った。巽、すなわち上宮にたいする舞である。一日より一二日まででは毎夜百太夫殿で舞う。一三日夜は一渡り、一四日夜は村渡りといつて大宮・若宮・大貳堂・女禰宜・宮司・百太夫殿で舞い、宮司と女禰宜は酒杯を授ける。細男の鼓打ちは二人とも八尺の白布を顔に垂れて舞う。一四日の和間浜への行幸に細男は乗馬で加わる。

一日には内取の相撲、一二日に屋形見、蜷饗がある。放生会縁起に是一四日と一五日についてこのように記されている。

史料14

一十四日行幸 早天ニ惣檢校惣辨官等出仕シテ諸度調、倉司大夫
祝太夫開脇殿奉厳神輿頭書生人夫ヲ役所ニ方々ニ渡之、大宮司以下至前着座、下鷹ハ西
大門ノ前ニ列、清潮伶人奏乱声、少宮司神主等開御殿、大宮司伺官等参内院、奉出御驗、
奉乗神輿、祝太夫奏祝而召立、

(中略)

一浮殿行幸已冠^先御裝束所惣檢校参浮殿奉粧嚴、
陣道奉警蹕、

奉移御驗浮殿^{御傍子御座伺官昇之、天蓋御杖人奉差之、蓋ノ緒者}
惣檢校并廳内衆奉引之、列如例、此間樂人吹乱声、
一若宮御幸^{神主奉持胡床御脇息、陣道奏警蹕}

一四日には御驗を乗せた神輿が和間浜頓宮へ臨幸し、翌一五日には御驗を寄藻川の浮殿に移座し、若宮の御幸がある。放生会は龍頭鷄首・傀儡子船・放生供養と続き、応永二〇年(一四一三)「和間濱放生會法用場莊嚴并假屋注文」⁽⁷³⁾図1はその興奮を彷彿とさせる。会式によると、細男は一四日の迎講で頓宮東庭宮司、国司屋頓宮西庭黒手女禰宜で舞い、翌一五日の傀儡舞は御前と女禰宜屋形の後ろで舞う。のち神は頓宮に還幸し、舞樂がある。

ここで、細男が如何なる組織に所属したのか追ってみた。復活した年の記録『宇佐宮現記』応永二七年(一四二〇)八月条和間浜への陣列次第に「次小舍所、行事并細男衆」とあり、これは会式の記述と同様であり、細男衆は小舍所に属した。小舍所との関係は明らかでないが、室町後期より一七世紀初頭までは細男は健児所に属していた。文明八年(一四八六)一〇月一九日付『宇佐宮惣神人連署申状』に「兒男所十二人 兼吉(以下人名略)、天文一三年(一四五五)一〇月一〇日付『放生会日記控』に「朔日細男打布一端、健児所下⁽⁷⁵⁾ニ行之」、寛永四年(一六二七)頃『宇佐宮二御殿立柱次第記』に「次ニ登場ニ而細男試案三番健児所勤」、『宇佐神宮旧神官職名私考』に「健児所本司 細男の舞樂を奏する頭なり 健児所五家 同権一」とあり、健児所は本司一人、権一

に率いられた計七家の芸能者集団である。

近世の『宇佐宮行幸絵巻』⁽⁷⁸⁾に「健児所細男太鼓」と記された下に、烏帽子を被り裾をはしよった白衣の神人が二人描かれ、胸高もある太鼓を担いでいる。⁽⁷⁹⁾その後ろには五人の烏帽子白衣の神人がおり、中の二人には「右の鼓」と記され羯鼓を首から掛けている。七人からなる細男一座で、太鼓・羯鼓（舞人）・楽人の構成による人間の細男芸である。『宇佐宮神官交名書上帳』⁽⁸⁰⁾によれば本司の垂水氏は宇佐市畑田、健児所は六家の伊藤氏で、『光忠記』⁽⁸¹⁾によれば宇佐市岩崎にあったことがわかつている。以上より、人間芸細男は、健児所に属する神人であったことがわかる。^(補註)『豊前志』所載の「てい／＼」と「けんばい」の細男歌謡は彼らによる歌謡、すなわち人間芸細男の歌謡である。

次に傀儡戯を検討する。一五日の浮殿行幸ののち傀儡戯が行われた。各史料によるとこのようになる。

会式 Ⅱ 傀儡子船二艘^{上毛一船}、漕^{下毛一船}参浮殿御前舞之、其後於^二女禰宜屋形之後^一舞之

会式所引「宇佐宮放生会事」Ⅱ自^二頓宮^一行幸干浮殿^二之時者、於^二両国^一所出現^二之龍頭^一鷄首、^{彌家}獅子^{彌勒寺・法}、^{鏡寺役}小駒犬、^{山元・米}傀儡子^{繩郷役}、^{上毛}郷勤者、皆表^二上古之形体^一、自^二舟参^一干神前、顯^二種々之曲^一、放生会縁起Ⅱ傀儡子船二艘^一（一艘^{上毛郡小今井}、一艘^{下毛郡津役}）浮殿御前漕参奏舞樂
宇佐宮現記Ⅱ古表船二艘、一艘^{上毛郡}下毛郡千間名所役也、一艘^{上毛郡}吉富郷所役也、於海上天傀儡舞之、駒形二頭山本役、獅子ハ法鏡寺役也、此二艘ハ江嶋・住江之船也、

傀儡は宇佐神領であった上毛郡と下毛郡の郷民に所役として当てられていた。傀儡と同じく駒形と獅子も海上で舞われており、放生会の儀礼は託宣記に記す隼人征伐の中世的解釈に反映されている。

山路興造は会式所引の「宇佐宮放生会事」中に「各施^二大刀^一」出^二十八部之衆^一（舞^{傀儡}子）とあることに注目し、室町時代には傀儡は隼人征伐の奇瑞を再現したものであると解釈されていたと論じ、海上の傀儡戯は人形による勝ち抜き相撲の芸であり、それが後述する元和の古表・古要の系譜に連なつたとした。⁽⁸²⁾

この「宇佐宮放生会事」は託宣集の先述巻五と同内容である。また、託宣集には「出二十八之衆令舞細男^{傀儡}子」とあるが、会式では細男の記述はない。このことから中世における細男は異国降伏を表す人間芸のみで、船上の傀儡戯は細男と認識されていなかったのではないか、という私見をもつがこの点については後述する。

元和三年（一六一七）当時の豊前小倉城主細川忠興によって放生会は再興される。現在までも福岡県築上郡吉富町小大丸の八幡古表神社と大分県中津市伊藤田の古要神社にかつて宇佐八幡宮の放生会に参勤した「傀儡の舞」が伝承されており、すでに汗牛充棟の研究成果が蓄積されている。山路によれば、この再興では舞樂の伶人はもとより広い所領も存在しなかったであろうから、本来人間が演じるべき諸芸能の復興ができず、その頃まで傀儡戯の伝承が生きていた古表、古要社と相談してかつては人間の演じていた諸芸能（細男を含めて）を傀儡戯として人形に演じさせたという。⁽⁸³⁾豊前城主細川家による慶長一〇年（一六〇五）一〇

月一〇日の宇佐宮造営の立柱上棟における細男は細川家の造営奉行、菅村和泉守内菅村藤兵衛久次と長岡武蔵守菅村市右衛門の所役であり、迎講のなかで演ぜられている。菅村氏は「府方職掌人」⁽⁸⁵⁾とも記され、慶長一八年(一六一三)宇佐宮立柱上棟儀式において「細男伎楽三番」⁽⁸⁷⁾を演じたのも彼らの所役であつたろう。岩崎に一七世紀初頭まで存在した人間の芸としての細男芸能者集団の根拠地「健児所」は、元和三年(一六一七)「人間が演じていた諸芸能をも、傀儡戯として人形に演じさせた」⁽⁸⁸⁾豊前城主細川家の再興以来、中世的細男芸とともに消滅する直前細川家に取り込まれたのである。しかし、中世祭祀組織の変容とともに消滅し、これは祭礼とともに辛うじて存在していた各地の健児所(諏訪・香取・鹿島など)⁽⁹¹⁾の消息と相通ずる。

ところで、文永・弘安期の蒙古の日本来攻は中世社会に衝撃を与え、特に八幡の世界において、縁起叙述、縁起絵、及び儀礼の世界にまで様々な影響を及ぼし多様な変容を強いた。⁽⁹²⁾『八幡愚童訓』(甲本)の成立背景には襲来直後、神徳発揚への恩賞期待という緊急の要求があるといわれ、その内容にも文永度の沓岐対馬への侵寇がはつきり述べられている。由来譚より靈験譚に重きをおく八幡宮のあたらしい縁起叙述であった。託宣集にもその影響は認められ、先述した巻五における養老四年(七二〇)の八幡神による大隅・日向の隼人征伐は八幡神神威発揚による元寇撃退と二重写しになっているのである。

宇佐八幡の縁起叙述において、細男が現れたのはこの時期のことである。『八幡愚童訓』(甲本)においては神功皇后の干満二珠の靈験による

三韓征伐と元寇撃退が重なり、その説話に細男が結び付いた。また、縁起絵において細男が登場するのもこの時期以降であり、それは以下の二系統が考えられる。⁽⁹³⁾一つは掛幅本系で神楽男の奏楽と八乙女の舞により磯良が現れ細男(顔に白布、腰鼓)を舞う系統である。玉垂宮縁起(建徳元年(一三七〇))、志賀海神社縁起、高良大社縁起などに代表され、主に九州に残り、社頭図と一具になっている。これらは絵解による縁起唱導に用いられたもので、『八幡愚童訓』(甲本)を典拠とする。『八幡愚童訓』は石清水八幡宮祀官の手になるものといわれ、⁽⁹⁴⁾すでに畿内で成立していた細男という芸能の起源を説明する形をとっている。私は石清水八幡宮の神楽の才男に関する知識が縁起叙述に入り、神楽男と八乙女



図9 八幡縁起絵巻(東大寺蔵)

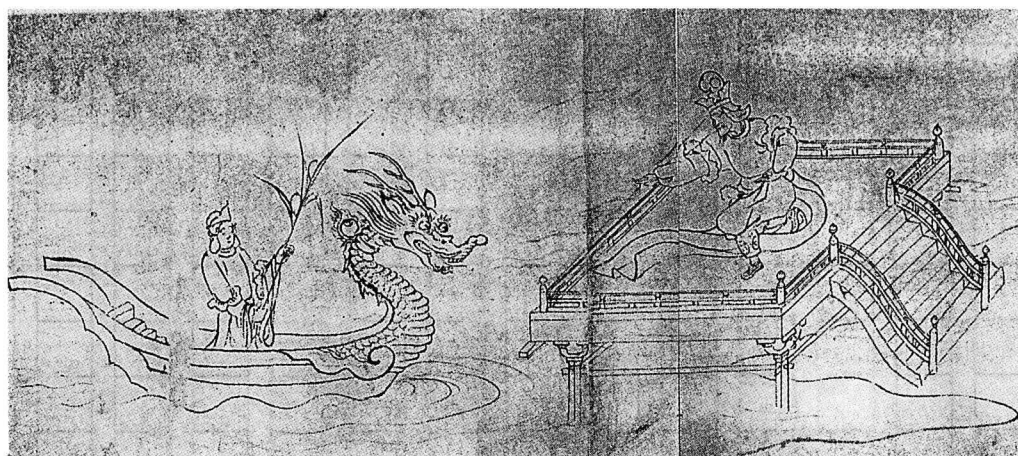


図10 八幡縁起絵巻（荏洲八幡神社蔵）

が呼び出すという内容になったものと推測している。

もう一つは卷子本系で、翁姿の住吉神が海上で細男の舞（舞楽）を舞って磯良を呼出すもので、そのなかでも磯良の登場の仕方によって磯良も細男舞（顔に白布、腰鼓）を舞いながら出てくる系統（東大寺本八幡縁起図9など）とその以外の系統（荏洲八幡神社本「八幡縁起」図10室町前期など）にわけることができる。卷子本系統の作例にしても、元冠以降のものであり、『八幡愚童訓』（甲本）とは違う縁起叙述にし

ても、細男と磯良の結びつきは八幡の霊験のアピールにはかならない。託宣集卷一五に、「相供ニ赴異国^{タイク}之給梶取者志賀明神是也。是沙加羅竜王乃梶取安曇乃磯良也、細男乃舞樂於構天召寄之世豆被召具之也」とあることから、この時期における磯良と細男の結びつきを確認できる。以上のような縁起や縁起絵の錯綜自体、中世における細男の多様な解釈を象徴しているといえよう。縁起の変貌は、それと不可分の関係にある儀礼に影響する。縁起は儀礼起源の説明体系だからである。

宇佐における芸能細男は元冠によって「誕生」したのである。一二世紀の『年中行事絵巻』にすでに白覆面と鼓の芸態が成立しており、細男を奈良舞という『八幡宮縁起』⁽⁹⁵⁾などからも近畿よりの伝播が窺える。それに元冠降伏（表異国降伏）が表象され、死者の恭順の芸態は、宇佐において意味づけられた。

以上のような意味における人間芸細男の「誕生」である。細男には敗北者の隼人と元兵が重ねられたばかりか、神功皇后に征伐された新羅兵をも連想されていた可能性もある⁽⁹⁶⁾。八世紀初めに服属した隼人よりも一三世紀の元冠の脅威の記憶が、芸能者を前代の国衙楽所伶人から宇佐宮付属健児所所属の神人（宇佐では楽人・法者）に結び付けたのかもしれない。

眼前の殺戮ではなく、隼人征伐に仮託して元冠における神威発揚を表現したところにこの期の放生会の本質が象徴されている。

その背景に石清水八幡宮の九州における勢力拡大がある⁽⁹⁷⁾。二七代別当光清の代には宇佐弥勒寺及び喜多院、筑前竈門社、大隅正八幡宮の職務

を兼業し、さらに天喜三年(一〇五五)には清成が肥前千栗、筑前大分、筑前宇美、豊前香美の雑務を兼務し、宮崎の検校にも補された。天慶の乱を機に石清水八幡宮の別宮五別所が建てられ、これら諸社の力もあつて九州における石清水八幡宮の地位は確固たるものになった。

宇佐において変容した細男が再び、室町期春日若宮祭礼や東大寺転害会に逆伝播し、平安・鎌倉期の細男を大きく変化させたものと思われる。傀儡舞は中世前期より存在したが、前述の通りこれは細男とは認識されていいない。神祇が迎講の二八部衆の演ずる傀儡舞を細男と記しているのみであり、私は彼が迎講における人間芸細男と翌日の二八部衆(伶人)による船上の傀儡戲に対してはつきりした認識をもっていなかったものと推測する。それは託宣集一五巻に「細男乃舞楽」とあることから類推できる。前述したように年中行事記録に、一五日船上の傀儡戲を細男と記している史料はないのである。

山路によれば古代から中世前期にかけては国衙などの保護によって豊前国楽所による舞楽・菩薩舞・獅子舞や職能芸能者による傀儡・相撲・八乙女の神楽舞・細男舞が行なわれた、という⁽⁹⁸⁾。そして、それらの古代的芸能者の多くは、国衙荘園体制による経済的基盤に支えられていたが、鎌倉時代後期以降の社会体制の変革によってその存立基盤を失うことになった、という。

室町復興の宇佐の傀儡は神社付属の楽所伶人によるものであり、獅子舞も伶人が迎講の舞楽とともに演じたのではないか。その芸態に関して、山路は大型の人形を使って特定の力士が多くの力士を相手にして片っ端

から勝つような相撲を想定⁽⁹⁹⁾しており、元和の再興と基本的には変化がなかった、とする。これに対して私は中世の傀儡戲を太刀や鉾を手にして舞楽の舞を舞う人形と想定している。

ところで宇佐市南宇佐百太夫に鎮座する百體殿は、永享五年(一四三三)成立『宇佐宮御造宮並御神法会御再興の日記』応永二十七年(一四二〇)一月十一日条に「百太夫殿社」とある⁽¹⁰⁰⁾。百太夫の社司については、『太宰管内志』に「この社の神官は皆伶人なり。」とあり、北崎道代は明治三五年にこのように記している⁽¹⁰¹⁾。

史料15

杜女初メテ八幡大神ノ禰宜ニ任セラレシニヨリ大神氏ノ女任セラル、例トナレリ。然シテ余力家ハ比義翁ノ後胤ニシテ家職ハ祢宜ノ太夫ナリシヲ以祢宜ノ太夫トイフ名ヲ以奉仕シタリ。女祢宜の魔絶ノ後ハ伶人職ヲモ兼且ツ宇佐下毛上毛国東等諸郡ニ散在セル宇佐宮発者(神楽トモイフ)ヲモ支配シ、亦撰社黒男社、末社女祢宜社ヲ監護シ同末社百體社ノ社司ヲモ勤メテ明治五年ニ至レリ。

黒男社は参道右にあり、その付近に女禰宜社があった。女禰宜(禰宜太夫)は託宣、楽人(発者を含む)を支配し、黒男社と女禰宜社を管理し、その末社であった百太夫社の社司でもあった。この魔絶後は祢宜ノ大夫が託宣以外を司った⁽¹⁰²⁾。室町再興以降は、自ら伶人であった女禰宜(禰宜太夫)は宇佐・上毛・下毛・国東に散在する神楽人(発者)・伶人・細男・傀儡を支配した。会式に記された細男・傀儡が女禰宜に特に周到に舞を奉納している事実も思い当たる。宇佐において、百太夫は託宣と芸能を奉ずる女禰宜の神であった。放生会に夷を祭ったことは、図

1にもみえ、これは市場の神でもあったであろう。前述したように『宮寺縁事抄』には、石清水八幡宮における傀儡の神武内が宇佐では善神王に相当すると解釈されていた。建武二年（一三三五）成立の『宇佐八幡宮縁起』には、左善神王は阿蘇大明神、右善神王は高良玉垂大菩薩であり、『宇佐宮現記』にも「應永卅三年（一四二六年—福原註）十二月十三日、左右善神王殿南中樓ニ御安座、左ハ阿蘇大明、右ハ高良玉垂宮大菩薩ニテ御座也、」と同様である。儀礼からみても卯日大祭において「善神王殿御服紙二帖」を陰陽師が請け取っていることがみえるが、宇佐の善神王は直接傀儡と結びつく記述はない。

宇佐八幡宮放生会における人間芸細男と傀儡戲の変遷についてこのように考えることができる。

人間細男Ⅱ元冠以後登場（宇佐宮樂所伶人）・室町再興以後禰宜太夫

支配健児所・元和再興以後消滅

芸態は一定で、顔に白布と腰鼓

傀儡戲Ⅱ中世前期から存在（宇佐宮樂所伶人）・鎌倉後期（宇佐宮

樂所伶人）の芸態は鉾、太刀舞・室町再興以後上、下毛郡

所役で禰宜太夫支配。芸態は鎌倉後期と同様（放生会縁起

の「奏舞樂」を参照）・元和再興以後古表、古要社の所役。

芸態は相撲（一五日に行われる人間の相撲と当時の相撲流行の風潮の影響）、羯鼓を用いた人間芸細男の傀儡戲化（細男という名の継承）、前代以降の太刀・鉾の舞及び仏舞。

(二) 豊後杵原八幡の勢納

豊後杵原八幡神社は由原宮とも称され、五十良舞が伝承されている。⁽¹⁰⁾

夏越祭、現在では七月三十一日の秋祭（中秋祭）と九月一四・五・六日にかけて行われる放生会に、浜の市の頓宮で五十良舞が行なわれる。五十良は顔に蠣が吸いついているので、人目を避けるため布を前に垂れると伝えられる。次のような歌詞をとえながら大前で舞う。

八幡ずの色は浜のまさごのかずよりも

久しきものはつるの毛衣

栄ゆれば国もたのしき 栄ゆれば宮もたのしき

栄ゆれば我が君は誰にぞ 千代まで栄えますます

舞人は大人と子供の二人でこれを社役といい、社役の舞ともいった。

社人の中の若手が烏帽子を被り狩衣を着け袴の股立ちをとって、鼓・太鼓の囃子につれて舞った、とも伝承されている。

夏越⁽¹¹⁾の祭は民俗語彙ではオンバライといい、杵原八幡の仲哀天皇・応

神天皇・神功皇后の順で三基の神輿が約四キロの生石浜の浜の御殿、御旅所まで神幸道（下向道）を通過して神幸（オサガリ）をした。以前は今の電車道あたりまで海が迫っていたので御旅所のすぐ側で海に入り、浜の御殿へ向かった。社役の舞う周囲の三方にはむかしは茅の垣根がめぐらされた。御旅所の側を流れる祓い川の岸辺で刈り取られた茅の根もとを揃え、その三ヶ所を藁で編んで薦状にし、それを連ねて三方に張りめぐらす。そしてこの茅の垣根の外側には直径二メートル弱の茅の輪が三方

に一個ずつ立てられた。その日の夕方、浜で掘った蛤三升のおみやげが整うとお立ちになるが、神輿は神幸とは逆の順でオサガリになる。神輿の後方には賀来(大分郡賀来村賀来社)の善神王がお供する。馬上口覆いをした神官が袱紗に包んで善神王の神体を捧持する。杵原八幡境内の榊を材料にして三三年毎に刻みかえられる六〇センチメートル余りの細長い神像である。この神体について『神洞随筆』⁽¹⁰⁷⁾にはこのように記される。

史料16

此賀来社善神王神體と云ものは、杵原八幡の材木のこけらを持て作る事なり、杵原社は三十三年に一度改造るに、其第一の材木のこけらを用ふる由なり、されば其神體と云物は、いといとかりそめなる物なり、只に頭ばかりを作りて、常には杵原八幡の神殿内の柱にかけ置く事なり、善神王祭の時には、其神官二人有りて、神體を手を捧けて、賀来の社に至る。(中略)濱市祭の時も此神八幡宮神輿の御供なるが、例の神官、手に捧けて、馬上にてもものする事なりとあり、

善神王祭は九月一日より一〇日、杵原八幡の摂社武内大神が賀来社に神幸する祭である。善神王(武内宿禰)はつんぼの神様といわれ、昔、主神の杵原八幡から「賀来へ行って住め。そして一年の内一〇日間だけ帰ってこい。」といわれたのを、「一〇日間だけ賀来へ行って住め。」と聞き違えたのが祭の起源伝承である。

放生会⁽¹⁰⁸⁾は三基の神輿が生石浜の御旅所まで神幸道(下向道)を通して、神幸(オサガリ)・還幸(オノボリ)するのであるが、この民俗語彙は還幸の重要性を暗示している。神輿の後方には善神王がお供をし、善神王の氏子も従う。

当社の放生会は乾元二年(一三〇三)八月一五日の「在国司沙彌行念請文」⁽¹⁰⁹⁾によると、豊後国東郷が生石浜放生会の船役を勤仕していたことがわかる。

嘉元三年(一三〇五)二月「由原宮年中行事次第案」⁽¹¹⁰⁾にはこのようにある。

史料17

八月一日、注連下、饗、百三十六前、平丸保役、

(中略)

同朔日ヨリ十一日ニ至、試樂アリ、饗膳酒肴有、

神官等役

随二分限一支配之、

(中略)

同十一日、市渡饗榮八種、飯二升盛、酒二流、千代丸名役

已上善神王御供四膳、米四升、饗膳米二石三斗五升、酒肴米一石、

都合三石三斗九升二分賀来越中守一分万壽寺座主勤之、

六月末日に浜殿の御祓があり、八月一日より一五日までが放生会である。一日が祭場聖化と表示の注連下しで、一日より一五日までの試薬がある。一日に市渡りがある。放生会の生石浜は市立が盛んであったので、その表現されたものであろう。注目されるのが、善神王御膳である。「由原宮年中行事次第案」によると一一日に神幸するのは善神王なのである。

正慶元年(一二三二)一一月の「由原宮年中行事次第」⁽¹¹¹⁾にはこのようにある。

史料 18

十一日

試樂^(異筆)於大宮司宿所^(異筆)行^(異筆)之、^(異筆)「号政所」
神官供饗膳酒肴^(異筆)千与丸役

馬長八騎名主百姓役^(異筆) 村「ハ」聲納神人役 行事名、役

田樂供僧等役 相撲十番^(異筆) 神官名主役
自二日至三十一日神事在^(異筆)之、

聲納饗膳神官等役、於政所^(異筆)行^(異筆)之、

十二日

御大路造國衙沙汰、郷々役

御殿造如五月會

(中略)

十四日

御行幸次第同五月會

御供備進在限郷役馬長 村 田樂^(社家役)
如試樂^(異筆)

舞樂 蝶鳥 馬長 村 十烈 東舞 相撲五番國衙役

旗鉦三本内一本國東郷役
一本佐賀郷役

在廳神官饗膳乙丸保役

神官供僧臺飯大宮司沙汰知行分米出ツ、同乙丸役

御前并大宮司屋形前松明國東郷役

十五日

佛供養 標山國分役、奉安置阿弥陀像、
^(寺脱カ)

講讀師國分僧役 請僧社僧役

菩薩舞 駒形 駒大國分寺役

舞樂 蝶鳥舞 東舞 十烈

師子^(異筆) 龍頭國衙役 相撲十番國衙沙汰郷々役

大行道次第^(異筆) 菩薩 國分僧 蝶鳥 社僧 在廳 樂人
舞人 師子 駒形 駒犬 村 田樂

村という芸能が勢納神人役で、大宮司の宿舎である政所で饗応をうけている。一四日には浜御殿に行幸ののち村が演ぜられ、一五日の仏供養

(迎講)でも大行道に加わっている。宇佐宮との違いは、一五日に国衙役の龍頭(船)があるが、傀儡船は出ていない。

嘉慶二年(一三八八)三月「賀来社御行幸儀式次第注文」⁽¹²⁾では、一五日の迎講に村は演ぜられず、大行道にのみ加わっている。

ここで、神人における勢納の位置づけを追ってみよう。元亨四年(一三三四)正月「賀来社神人名帳」⁽¹³⁾では、神人は神官・貫首・檢校・勢納・御手人・長御崎・御島副・馬長・供僧にわかれ、勢納衆は平九郎・弥藤三・三良貫主・馬次郎・新三郎・平十郎・笛檢校・三郎檢校・低庭・平内次郎の一〇人構成で、低庭(ていてい)は鼓役と笛他八人である。

至徳四年(一三八七)五月二日「賀来社神人名帳」⁽¹⁴⁾では神人は神官・貫首・檢校・勢納・供僧にわかれ、勢納分として源内次郎檢校・弥三郎檢校・弥太郎檢校・馬次郎檢校・新三郎檢校・弥次郎檢校・弥八檢校・弥三郎檢校の八人が書き上げられている。これは先より鼓、笛を引いた構成であろう。勢納にはこの八人の檢校の下位に御手人二人、長御崎二人、御馬副一人、馬長九人が存在した。

元和六年(一六二〇)正月一日の「由原宮社家衆次第書」⁽¹⁵⁾には、社家衆として神官、勢納衆、貫首、祝、命婦、御炊殿檢校、国衆が記され、勢納衆として各村の一ノ法者・舞主・内侍、東院村(宮園・酒殿檢

校・筑紫校)、由原村(大井ノ校・田ノ口・平井・理介)、中尾村(行事・脇兩人)があげられている。勢納衆は元亨より至徳に至り御手人以下の者が含まれ、その認識が広がったが、八人構成で変化はない。

近世には、中世以来の勢納衆(東院村・由原村・中尾村の一〇人)十各村の神人や楽人で組織されるようになる。近世の祭祀組織の大変革にとりもなう影響であろう。寛永一九年(一六四二)五月に記された『豊後一宮賀来社旧記』(旧記と略す)中「毎月祭祀之事」には正月二日にへんばいがあり、当時は浜校の役であるが、昔は一ノ法者の役であったと注記されている。勢納は正月に反閨を踏む陰陽師の要素も有していた。

旧記には三三年毎の式年遷宮史料が載る。遷宮に際して御神宝を移す時、「金銀五色の御幣持衆声納衆役也 天蓋三棒一ノ法者舞主宮園ノ役」⁽¹⁷⁾とあり、声納は御幣や天蓋を持った。仮殿に移す下遷宮時の「入ましの庭□」や諸社清祓も声納の役であった。本社への上遷宮の時に神楽初めを演じるのも勢納である。

柞原八幡の勢納は一四世紀より確認でき、宇佐よりの伝播と思われる。放生会で人間芸の村を演じ、それは五十良舞に継承された。史料上の六月晦日の御祓が、放生会の一環であるように、夏越の祓いも放生会といえる。民俗伝承で夏越の祓いにも五十良舞が演じられているところから、逆に中・近世の六月晦日御祓において、村が演ぜられていた可能性を類推できよう。

当社には放生会一五日の海上の傀儡戲はないが、柞原八幡の摂社武内大神の善神王(ぜじのう)は『神洞随筆』にもある如く傀儡であろう。

石黒吉次郎によると、当社には勢納の人形が遺っているという。⁽¹⁸⁾

なお、大分県田川郡赤村中山鎮座の我鹿神社(赤村八幡)の「二月四日新年祭御許神楽翁舞乃歌」における古謡の「せいなふの舞」⁽¹⁹⁾や神楽に流入した磯良舞など、九州における宇佐八幡放生会の影響は非常に大きいことを確認しておきたい。

(三) 阿蘇社の細男舞

阿蘇社の細男は放生会と九月九日会(オクンチ)に演ぜられ、室町期成立の「阿蘇社年中行事次第写」⁽²⁰⁾に記される。

史料19

一大明神二階之樓門ニ御幸ノ時くは手の御供、中司三人ノ役、

(中略)

同時樓門天井之薦、逆敷ニシクコモ、十二府懸テアミ立四尋三尺、狩尾ヨリ納之、

同時村之舞、五太夫役、装束ハ立烏帽子ニ狩衣、沓、キンケン刀槍扇ヨウノ太刀帶候、頭ニハ絹ニテ一、幅ニ鳥帽子ノ着際ニ引廻シテ垂候、是ハ^(細)ハせいなふと云舞ヲ表シ候、七尺五寸ニ新敷鉾毎年作立被^(足)持候、支度ハ經坊本堂ニテ被^(足)仕候、扱北之廻廊之ついとふりより、舞殿のこつく舞いられ候而、夫ヨリ四あしまてあらこもを敷候而、其上ノ儘四あしニ舞入候而、樓門のこつく被^(足)舞入一候、

神葉にゆふしてつけて誰か世に神之社と祝初ケン
千岩破我力心ヨリスルワサヲ何ノ神カ餘所ニ見ルヘキ
右成就シテ後、本ノ如ク後^(ツ)シザリニ逆ニ舞廻リテ、舞殿ノ如ク舞入テ、御鉾

ヲハ一ノ御宮ニ奉納、五太夫ハチャウノ屋ノ如ク出仕ス、其後爲ニ供僧役ニ
法花八講有、其后社家出仕之人ミ、右ノ所ニ下向、

神輿が本殿より二階の楼門に神幸する。五太夫が鉾をもつて村の舞を
奉納する。これは細男という舞を表現するものであるという。のち相撲
が一七番行なわれ還御する。九月九日の行事はこのように記される。

史料20

一同時二階ノ樓門ニ御幸ナラセ給フ時、神之御膳廣かいしき七重積七十二膳あ
り□ふに盛テ奉レ備、御甘酒七十二ノ幣之土器ニテ鳥瓶子ノ御甘酒奉レ備、其
后供僧役トシテ仁王八講アリ、
一同時馬場之役トシテ鎗流アリ、五月ニ同、
一同時くらうとまちあり、五月ニ同、
一同時相撲アリ、番組五月ニ同、
一同時鉾ノ舞アリ、三太夫役、装束ハ立烏帽子ニ狩衣、襦子沓、きんけん刀槍
扇ようの太刀帶、頭ニハすゝしの絹ニテ一幅ニシテ、烏帽子ノキハニ引廻
シテ垂候、是ハせいなふと云舞ヲ表シ候、七尺五寸ニ鉾ヲ毎年ニ仕立被レ持
候、支度、經坊本堂ニテ被レ仕候、扱北之廻廊のついとふりより、舞殿のこ
とく舞いられ候而、夫より四あし迄荒鷹を敷候而、其上ノ儘四あしニ舞いら
れ候、

九日会でも二階の楼門に渡御があり、三太夫役の鉾ノ舞(細男)があ
る。「阿蘇社年中行事次第写」異本によるとこの舞は鉾舞と記されてい
る。この舞は放生会の村の舞と全く同じで演者のみが違う。のち、社家
による競馬、巫女渡り(二騎)、相撲、十烈、田楽、流鏑馬一七騎があ
る。

さて、同史料によると五太夫と三太夫は神人や楽人と区別される惣官
であり、他社でいうと神官にあたる。

林屋辰三郎は、「村之舞」が神人たちの役であり、神人は猿楽も勤仕
するので、この「村之舞」は楽頭の奏するものとす。⁽¹²⁾萩原龍夫はこの
村の舞、細男舞について「細男という芸能はごく鄙びた性格をもってい
たから、このように儀式的色彩の濃い神幸式の一部に加わって民俗的気
分を添える役割を担った」と論じている。⁽¹³⁾しかし、村の舞、鉾の舞は神
官が演ずる舞楽で、放生会に演ぜられたから細男という舞を表すと解釈
されたのであろう。また当時細男Ⅱ村という知識が九州の大寺社に流通
しており、放生会―細男―村の舞という連想から、本来の舞楽鉾の舞か
ら村の舞と称されたものと思われる。

(四) 志賀海神社の細男

志賀海神社は安曇族の祖神である関係で、折口糸細男論「海部の芸
能」の抛り所である。⁽¹⁴⁾

志賀海神社の細男舞は旧九月九日に演ぜられる。⁽¹⁵⁾

旧九月一日が男山祭で御前一〇時、神社関係者(古老を含む)一同列
席の上宮司によって「おみくじあげ」(神占)が行われる。黒木の椎の
幣串を用いて作られた御幣を以て三方に置かれている籤をとり、宰領
(四人の代表)に渡されるとこれを開いて朗読する。「御神幸あり」と
いうことになる。神職および社人でお飯屋にひもろぎを立てに行く。
その時に「男山」と称する文句の歌を歌いながら赴くのでこのおみくじ

上げの祭を男山祭と称するのである。「男山」は「やあ、男山、峰のとー、やおよろず、昔も今も、なすよしも（がな）カチッ（笏拍子一拍）」というものである。

旧九月八・九日の御神幸祭は民俗語彙としてはヨド（夜渡）という。御神幸祭当日は午後九時（昔は衣笠山に月が入ってから始める）の御遷霊の後、発聲する。この神幸には、獅子頭、奏楽手というささら、笛、大太鼓が供奉する。御旅所の頓宮では、竜の舞・八乙女の舞・羯鼓舞が演じられる。竜の舞は獅子舞と呼ばれている。

この羯鼓の舞は、楽座一良が神前に立って以下のように舞う。

- 1 紅布にて羯鼓を胸高に吊る。
- 2 白布にて覆面をする。
- 3 バチを手にとる。

4 一礼。「舞のうの岸のひめ松や」を唱えながら一回転（右廻り）正面にて一打。

一礼。「舞のうの岸のひめ松や」を唱えながら一回転（右廻り）正面にて一打。

一礼。「舞のうの岸のひめ松や」を唱えながら一回転（右廻り）正面にて一打。

志賀島ではこの舞（所作と詞章のみ）を歩射祭の時、扇舞、ガラ藻の舞として演ずる。

九日の午前一時に還幸御本社祭が行なわれる。九日のお宮日（国土祭と称している）に相撲が行なわれ、相撲開始前の流鏑馬では相撲姿の者

が飾りをつけた禪をしめて馬の口とりをする。

羯鼓の舞と称する細男に関しては史料が殆どない。羯鼓の箱書に「文政七年（一八二四）福原註）申正月吉辰 かつこ箱」とある。『筑前国続風土記』、『筑前国続風土記附録』、『筑陽記』、『筑前名所図絵』など一八世紀以降の地誌類には九日会の流鏑馬の記載はあるものの、羯鼓の舞の記載はない。ただ、文化元年（一八〇四）の『香椎廟宮記』に「九月九日大給田の供を献す、早朝に、流鏑馬あり、三騎にて、的九枚を射る、次に猿楽あり、」とあり、幕末の『香椎社法復古』に前半は同じだが、「次に猿楽田楽」とあるのみでこれ以外に九日会についてはわからない。延宝四年（一六七六）の『当社古道龍都阿曇社諸祭記』には、年中行事とその御供数を列挙するが、九月九日のみ「右座の田とう人ヨリ酒肴指餅口明ケ有り」と記され頭屋の祭であったことがわかる。

この神社の秋祭は、北九州において特殊なものではなく、旧九月九日の九日会（民俗語彙でオクンチと称する収穫祭）であり、当地では「国地」（くにち）とあてている。田楽―流鏑馬―神楽―相撲―細男―獅子舞の一連の芸能構成だけは明らかである。現在伝承されている羯鼓の舞の成立はわからないが、みくじのふり上げ男山はやはり男山八幡を連想させるものではなからうか。

三 諸国の細男

(一) 杵築社の細男

一一世紀、杵築大社国造は国衙の強い支配を受けたが、それは同時に国衙が中心となってその造宮・遷宮を一国レベルの事業として担うことでもあった。⁽¹²⁾ その結果、社領が寄進されていき、「出雲大社」として国内の地位を確立した。一三世紀頃には、天台系の鰐淵寺と結び付き、国衙にとっては国内支配に有効なイデオロギー装置として必要不可欠な存在となった。その一方で、すでに平安末期より領家が設定され、鎌倉期の全般にわたって、国造家と本家・領家・幕府・国衙（在庁官人）の四者によって複雑な政治過程が生み出される。

一宮としての大社の三月会は「國中第一之神事」⁽¹³⁾ で「其会者、差定五方之頭人之内、左右相撲頭并舞頭、是三方者為國中地頭役、令勤仕（云々）」⁽¹⁴⁾ とされていたが、実際は大規模な神事や造宮・遷宮の事業は国造家とその社領のみでは不可能で、在庁官人が引き募る免田（国衙領に散在）や国衙機構を通して賦課される一国平均役に依存しなければならなかった。

杵築大社には、康治元年（一一四二）仮殿遷宮⁽¹⁵⁾、久安元年（一一四五）正殿遷宮⁽¹⁶⁾の康治・久安の遷宮と宝治二年（一二四八）正殿遷宮⁽¹⁷⁾の史料が伝えられており、両遷宮ともに芸能の記載がある。康治遷宮の場合、当日に舞楽、翌日に十烈・走馬・東遊・競馬五番・笠懸三番・曲舞（舞

楽）・相撲一〇番・勝負舞が行なわれ、久安の場合翌日に東遊・十烈・競馬五番・笠懸五番・曲舞（以下史料欠）が演ぜられた。

宝治二年一〇月二七日に遷宮があり、翌二八日に神事が行なわれた。

次舞人十人預御馬、打立馬庭上御馬也、

次東遊、舞人十人内<sup>在庁八人
書生二人</sup>

（中略）

加陪從六人内<sup>在庁二人
書生四人</sup>、国掌二人

（中略）

次競馬五番

左国方五人（中略）

右社方五人（中略）

次花女 社家御子役

次村細男 郷々被宛 仍國中猿楽等勤仕之

次田楽 郷々被宛 乃國中猿楽等勤仕之

次流鏑馬十五番

一番在国司（中略）

二番守護所（中略）

（中略）

次典舞^{（曲々）}

（中略）

次相撲十番任先例被宛於郷々之処、自郷々令展、社相撲一向令勤仕之

留守所分 一人 細工所別当分 一人 在国司一人（以下一七郷

略す)

次陵王 納曾利

郷の舗設のもと国衙の保護を受けていた「国々の猿楽」が村細男と田楽を演じたのであり、国衙の伶人ではないところに「村細男」の表記が反映している。

(二) 諏訪社の細男

中世における信州諏訪社では、三月の寅日と九月の寅又は申日を祭日とする祭は、国司使いの参向を受けるものであった。他の在地系神事とは様相を異にし官察の性質をもち、単に御祭と称す国司祭である。⁽¹³⁸⁾

当日は国司の使いである祭使が在庁官人などを率いて神社に参向し、祭使以下が正面の廊に着座し、神物(神馬・金銀・絹布など)を奉る。国衙側の四人が池廊に臨んで太刀を抜いて四角に立ち曲を奏でる。次に在庁官人が大祝に奉幣し、大祝が祭使と対座して盃酌する。

鎌倉期の『嘉禎記』と南北朝の『諏訪大明神絵詞』では以上の次第しかわからぬが、室町期の年中行事次第である『年内神事次第旧記』⁽¹³⁹⁾にはより詳細な記述がある。

一春秋祭ニ使殿^成(の)なし物之事

舞人十人、八乙女神楽男に十三人、田楽、ほそ男、あつま、あち

ひのまひ ^舞 ^{次第ニ}「山女ヲ抹殺シあちひトアリ」

(中略)

一御幣之後御正面へ御参ありて、殿^(カサリ)(之)馬、臺台之廻^(重)(を)一まはり、

使殿馬二廻^{十烈}(州)烈師之馬三廻、其後^{十烈}(州)烈師乗後太刀舞、田楽、ほそ男、あつま、あちひのまい、御子^(此)舞^過(此)て^(上意)祝殿

(射與と給て)使殿^に(と)御対面有て、廳使殿ハ歸り給^也(ふ)

宮地直一は、太刀舞は国衙よりの参勤の舞人一〇人が演じ、田楽・ほそ男・東舞・阿知比の舞は舞人と諏訪社付属の八乙女・神楽男が演じ、御子舞は奉仕の巫女によるものと解釈した。⁽¹⁴⁰⁾ ほそ男は国衙楽所付属の一〇人の舞人によるものと思われる。

(三) 若狭の細男⁽¹⁴¹⁾

福井県三方郡三方町田井の多由比神社の祭礼は四月一八日で田井野、河内、田立、世久津、伊良積と新しく独立村となった成立の六ヶ村を氏子圏とする。現在ではこの六地区が年番で頭宿を勤めるが、別にこの祭礼に重要な役目を勤める神役があり、これを高持ちの家二四軒(現在二〇軒)という。高持ちの家は六地区に散在しており、神事芸能の王の舞、獅子舞、田楽、エッサカエツト、大御幣を勤める。エッサカエツトは世久津のみの伝承で、神役四軒が二組に分かれて交替して勤める。烏帽子・白丁の二人が白衣で顔を覆い、相對して膝立、その間に侍烏帽子・素襖の一人が鼓を打つ。エッサカエツトという呼称は、この鼓役が口の中で唱える「エッサカエツト 京の上の吉田の姫小松朝日がさしてかたえ」という文句によるものといひ、山路興造はこれを細男と比定し、⁽¹⁴²⁾ 橋本裕之はこのエッサカエツトは京都賀茂からきたものだという伝承を聞き出してゐる。⁽¹⁴³⁾

表 中世と現代の春祭（伊藤久之「草津の宮座と祭礼」より抜粋）

文安4年「神事記録」			現 行 の 春 祭		
月 日	行 事	内 容	月 日	行 事	内 容
2/1	榊持事	湯取・エヒス舞・ 7日1度宛の祓・ 蒿メ	3/25 4/1 4/27	お地盤つき お馬神きめ 準 備	土盛壇 闌びき 砂持ち・しんこ 作・人形作
3/1	馬上殿上笠 天神御参		5/1	お馬神社参	
3/2	夜 宮	獅 子	5/2	かくれまい り	お馬神
3/3	（本 祭） 馬上殿行事 御 行 夷御前 還 御 （後 日） 翁シメ上	走 馬 大 幣 獅子・田楽・刀玉 メ上げ・蠻舞	5/3	大 祭	お馬神・神輿など お旅所（夷社）へ 渡御 さんやれ踊
3/4 3/5			5/4	注連あげ	次の村へ神事荷受 渡し

滋賀県草津市下笠には老杉神社を中心として、殿村・細男村・王之村・獅子村・銚之村・天王村・十禪師村・今村といった何々村という宮

（四）草津市下笠の細男⁽⁴⁶⁾座

座組織があり、全体を総称して「八村」といい、二月の「おこない」、五月の大祭「お馬のかみ」、秋の「そもく」などを営んでいる。宮座のことを村というが、座名は地域区分としての村とは全く関係なく、座の構成員は下笠町内の各小字に分散している。

座衆は「仲間」とよばれ、古くはもろとといった。家ごとに世襲的に所属する村が決まっており、仲間の名簿である「顔付」に記載され、この台帳をもとにして諸費用の分担がなされ、年長順に役割が決まる。上六人を六人衆、上席を老長、次席を脇長、三席をのぞきという。老長は八年に一度変わる「おこない」の頭屋を勤め、五月の大祭を勤めると、五月四日の「注連上げ」で次の村へ神事道具を送り、老長の役も退く。脇長が老長となり、次の八年目の役が回るまでの間を勤める。

表は、文安四年（一四四七）「三月三日御祭礼」（『老杉神社文書』「神事記録」）と現代の習俗により伊藤久之が作成した年中行事対応表より春祭を抜粋したものである。

天王村は牛頭天王の神輿の引き手を出す村、十禪師は十禪師社の神輿の引き手を出す村、細男村・王之村・獅子村は現在には芸能の傍はとどめていないが、かつては細男・王の舞・獅子を出した村であろう。

下笠町・上笠町一帯に比定されている笠庄は貞和三年（一三四七）には足利尊氏が下笠郷の地頭職などを坂本日吉社に寄進している⁽⁴⁶⁾。神社に伝来している「社記」には天王を改宗して正一位大明神になったことが記され、同じく神社伝来の吉田神道による宗源宣旨二通には天文九年（一五四〇）における天王、十禪師より正一位大明神への改宗が記され

ている⁽¹⁴⁷⁾。一連の芸能構成は日吉社領になって以降に、日吉社型祭祀形態として伝播したと考えられ、現在「お馬の神」(中世神事記録の馬上殿)は日吉社の神事頭役の馬上役からきたもので、頭人が稚児をだしたものである⁽¹⁴⁸⁾。

この祭は、御旅所の夷御前における神幸、芸能が中心であったと思われる。『神事記録』応永二年(一四〇五)の箇所では、夷社前では獅子舞、田楽の刀玉が演ぜられた。夷子社はその御神体が洪水の際夷子川を流れてきたのを拾い上げて祀ったものと伝承されている⁽¹⁴⁹⁾。暦応元年(一三八九)二月二五日の日付がある『神事記録』には夷御前に奉納する蠻舞の記載がある。これはえびす舞で、夷御前に奉納する傀儡戯が細男ではなかったか。日吉社末社にはかつて百太夫社があり、傀儡集団の拠点としての痕跡がある。『近江輿地志略』によると、大津四宮(現天孫神社)の九月一〇日の祭礼には傀儡が芝居を構え、種々の木偶人をのせた山や鉾が出、車にてひき肩に担いだとある。下笠の傀儡舞は田楽・獅子舞・王の舞・競馬という芸能や祭祀形態とともに日吉社より伝播したものと考えられる。

おわりに―細男伝播の一試論―

人間の芸細男は奈良・京都の大寺社における芸能構成の一つとして成立した。『東大寺要録』では九世紀末、一一世紀の京の御霊会にみられ、一二世紀には白面覆と鼓の細男が確認できる。東大寺転害会や春日若宮

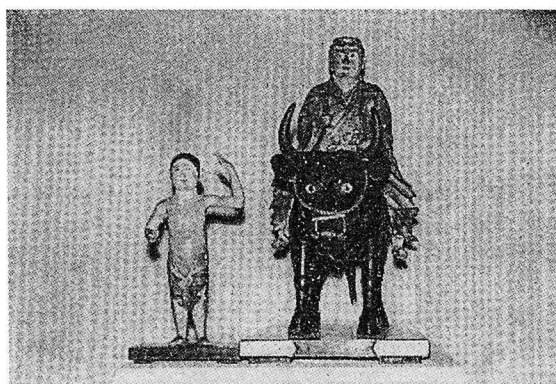


図11 神像 神功皇后(右)クグツヒメ(左)(八幡古表神社蔵)

祭礼の江戸時代の絵画にも白面覆と鼓の細男がみえるが、それが平安期より一貫したものであることは春日細男の詞章が八幡系になっているのをもみてもわかる。中世の法隆寺へは南都の伶人が伝えたものと思われる。宇治田原や奈良宇陀郡水分惣社の遷宮神幸の細男⁽¹⁵⁰⁾も大和よりの伝播と捉えることができる。

宇佐八幡宮放生会には、元寇以後、人間芸の細男が伝播し神話的に意味付けられた。杵原八幡などの細男は宇佐の伝播であり、阿蘇には細男の名称のみが伝播した。

一方、石清水八幡宮を中心に鎌倉期には傀儡戯の細男が確認できる。それは多武峰に伝播した。宇佐や杵原八幡の細男は傀儡戯ではないが、宇佐の傀儡や細男は百太夫を祀り、杵原八幡では善神王や武内大神が傀儡の神であろう。細男と傀儡とは不可分の関係があり、人間芸の細男舞は傀儡神を和ませる深層の意味をもっていたといえる。宇佐の放生会頓宮における夷社や杵原八幡の浜殿における善神王や武内大神は、放生会に立つ市・市神としての夷・夷を齎す傀儡の問題を抜きにしては語れない。

いのであるが、本稿では扱う余裕がなかった。

また、江戸時代の『日吉山王現知新記』⁽¹⁹⁾には近江日吉社の末社百太夫社が牛御子の隣に記され、「俗形、率牛與牛御子相殿、」とあり、これは八幡古表神社の鎌倉時代の作といわれる虚空津比売神（くぐつひめ）⁽²⁰⁾ 11と同じ図像である。日吉社にも夷を奉じる傀儡集団の拠点が想定され、下笠の細男はその伝播であろう。

諏訪社・大鳥社の細男は一宮・国衙祭祀形態において、国衙楽所に所属した職能芸能者による細男であろう。出雲の村細男は石清水八幡宮の村細男、柞原八幡の村、『春日若宮祭禮記』保延二年の村、阿蘇の村の舞と同じく、大寺社の法会・祭祀に参加する「国々の芸能者」ではなく、在地の頭役舗設による寺社付属の芸能者などであろう。村細男などではなく、舗設者や演者による表現なのである。

本稿を草するにあたり、山路興造・橋本裕之・清水洋史氏には多大なる学恩を受けた。末筆ながら、感謝するものである。

註

- (1) 『日本思想大系一〇社寺縁起』一九七五年。
- (2) 「偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道」『古代研究・民俗学編二』一九三〇年、一〇五五頁。
- (3) 倉林正次「神楽歌」『日本の古典芸能一神楽』一九六九年。
- (4) 御神楽の人長の名乗りのなかで、人長は近衛府の長官と男山八幡惣検校の資格を有することを述べる。石清水は御神楽の源流でもあり、『磯良崎』において人長が採り物の前に阿知米、つまり阿曇磯良神を呼出し神楽を奉仕させ、採り物の後に才男を呼び出し滑稽態をさせる。後述するように石清水八幡宮の祭には傀儡の細男も出る。ここから、御神楽才男―磯良―海

部―細男とイメージが連鎖したのではないかと。

- (5) 「さいのを抄」『古代祭祀と文学』一九六六年。
- (6) 「安曇磯良」『神道史研究』五一八、一九五七年。「安曇磯良続編（上・下）」『國學院雑誌』六一巻一五、六、八・九合併号、一九六〇年。
- (7) 『神道芸能の源流』一九八八年。
- (8) 「春日若宮御祭細男の歴史」『春日田楽・細男調査報告』一九七六年。
- (9) 『日本思想大系二三古代中世藝術論』一九七三年所収。
- (10) 『改定日本の人形芝居』一九七四年。
- (11) 「細男と才人白丁」『遊女の歴史』一九六五年。
- (12) 「人形劇の成立に関する研究」一九六三年。
- (13) 『日本演劇史』一九六三年。
- (14) 「八幡縁起と中世日本紀―百合若大臣の世界から―」『現代思想』二〇巻四号、一九九二年。
- (15) 前掲(8)論文。
- (16) 「田楽の分布と特色」『京都の田楽調査報告書』一九七八年。
- (17) 河音能平「王土思想と神仏習合」『岩波講座日本歴史』四巻、一九七六年。伊藤清郎「中世前期における石清水八幡宮の権力と機構」『文化』四〇―一・二合併号、一九七六年。同氏「中世国家と八幡宮放生会」『文化』四一―一・二合併号、一九七七年。同氏「石清水放生会の国家的位置についての考察」『日本史研究』一八八号、一九七三年。
- (18) 「小山田文書」八三三『大分縣史料』七、一九五三年。
- (19) 「宇佐放生会について」『中世日本文化の形成―神話と歴史叙述―』一九八一年。
- (20) 前掲(13)。
- (21) 手撮会についての記述は、和田義昭「東大寺鎮守八幡宮手撮会について」『中世の権力と民衆』一九七〇年。藤沢彰「東大寺八幡宮の社殿と祭儀―神社祭祀施設としての門に関する研究―」『建築史学』九号、一九八七年。武居由美子「中世における東大寺郷民の成長と祭祀」『年報中世史研究』一六号、一九九一年を参照した。
- (22) 『日本庶民文化史料集成二巻田楽・猿楽』一九七四年。
- (23) 同右。
- (24) 『大日本仏教全書東大寺叢書第一』一九一五年。

- (25) 藤沢によると絵巻第一巻は『統群書類従』所収の文明一四年(一四八二)「東大寺八幡転害会記」と同じ原本による写しである。細男が描かれている巻三は、延興が諸本を校合して写したものである。この細男の様子は文明以降中世の細男を描いたものと推定される。
- (26) 『神道大系神社編十三春日』一九八五年における永島福太郎の註による。笹田治人編「内閣文庫所蔵本興福寺年中行事(三)」『大和文化研究』一九六七年一〇月号。
- (27) 『神道大系神社編十三春日』一九八五年。
- (28) 『神道大系神社編十三春日』一九八五年。
- (29) 広瀬義雄「細男の由緒」『春日若宮おん祭の神事芸能』一九八二年。
- (30) 井浦芳信前掲『日本演劇史』より引用。清水洋史氏が広瀬家に詞章の伝来を確認している。
- (31) 広瀬前掲書。
- (32) 『改訂天理市史史料編第二巻』一九七七年。
- (33) 同右。
- (34) 「細男装束料願書写」『細男雑用費増加願書写』、前掲『改訂天理市史料編第二巻』所収。
- (35) 『改訂天理市史史料編』第二巻。
- (36) 同右。
- (37) 『奈良県の地名』一九八二年。
- (38) 『能楽資料集成』に翻刻。
- (39) 「狂言以前—モドキ・進行・闖入—」『文学』一九八三年七月号。
- (40) 「神事猿楽一面—猿楽の介人をめぐって—」『國学院雑誌』八五—一一、一九八四年一二月号。
- (41) 同右。
- (42) 同右。
- (43) 平安遺文二一八号「和泉國大鳥神社流記帳」(大鳥大明神文書)。
- (44) 大阪府編『大阪府官幣社現行特殊神事』一九三〇年。
- (45) 堀池春峰「中世(一)郷村の成立とその生活」『斑鳩町史』(本編)一九七九年。
- (46) 同右。
- (47) 『法隆寺史料集成』六、七巻、一九八四、五年。
- (48) 『斑鳩町史』(本編)一九七九年。
- (49) 同右及び『奈良県の地名』一九八一年。
- (50) 同右。
- (51) 同右。
- (52) 宇治田原三社祭の記述は、井上頼寿『京都古習誌』一九四三年。伊藤久之「宇治田原三社祭の芸能」『京都の田楽調査報告書』一九七八年。『京都府の地名』一九八一年。筆者見学による。
- (53) 伊藤久之前掲「宇治田原三社祭の芸能」。
- (54) 前掲『京都古習誌』。
- (55) 同右。
- (56) 『日本庶民文化史料集成二巻田楽・猿楽』一九七四年。
- (57) 『清水八幡宮史料叢書四年中行事服忌社参』一九七三年所収。
- (58) 大山崎神人に関しては田端康子「中世の大山崎」『大山崎町史』本文編、一九八三年参照。
- (59) 『日本思想大系二〇社寺縁起』一九七五年。
- (60) 『島本町史史料編』一九七六年。
- (61) 同右。
- (62) 「秋祭記録古式乃美天俱楽」大正六年(一九一七)。
- (63) 「談山神社嘉吉祭神饌『百味の御食』についての研究(上)・(下)」『日本民俗学』一八一・一八二号、一九九〇年。
- (64) 『神饌』一九八一年。
- (65) 『神道大系神社編五大和国』一九八七年。
- (66) 『神道大系神社編四十七宇佐』一九八九年。
- (67) 『日本祭祀行事集成』四巻、一九七一年。
- (68) 託宣集の引用は古代学協会編『史料拾遺』一・二巻、一九六六、七年による。
- (69) 「宇佐八幡宮放生会の傀儡戯再考」『芸能』一九八八年六月号。
- (70) 『神道大系神社編四十七宇佐』一九八九年。
- (71) 『大分縣史料』二、一九五九年。
- (72) 『神道大系神社編四十七宇佐』一九八九年。
- (73) 「小山田文書」八三三『大分縣史料』七、一九五三年。
- (74) 「到津文書」二五六号『大分縣史料』一、一九六〇年。
- (75) 「永弘文書」二一五八号『大分縣史料』六、一九五八年。

- (76) 「小山田文書」二〇二号『大分縣史料』七、一九五三年。
- (77) 明治初年成立。中山重記「宇佐宮細男考」『豊日史学』四〇—一・二・三合併号、一九七三年より引用。
- (78) 到津公（一七五六年）筆、中村公俊氏所蔵。一部が『神道大系神社編四十七字佐』や入江英親『宇佐八幡の祭と民俗』一九七五年に収録。
- (79) 中山重記前掲論文を参照とした。
- (80) 明治三年（一八七〇）成立。中山論文より引用。
- (81) 「益永政所惣検校宇佐宿称光輔忠輔日記」宝暦九年（一七五九）条。中山論文より引用。
- (82) 前掲「宇佐八幡宮放生会の傀儡戯再考」。
- (83) 同右。
- (84) 「益永文書」六〇号「宇佐宮御造宮並御神領覚書」『大分縣史料』二九、一九七七年。
- (85) 「益永文書」六六号「宇佐宮一殿御造宮並御遷宮次第号」『大分縣史料』二九、一九七七年。
- (86) 同右。
- (87) 「宇佐宮立柱上棟儀式次第案」「小山田文書」一五八号『大分縣史料』七、一九五三年。
- (88) 山路興造前掲論文。
- (89) 「こんてい所」『年内神事次第旧記』三月廻湛神事。『年中神事次第』では「健児所」「児侍所」。
- (90) 『香取文書纂』録司代家文書、応永三一年（一四二四）「覚書」に「こんてい所」。
- (91) 『税所文書』の「健児所」伊藤富雄『年内神事次第旧記』釈義一九七九年参照。
- (92) 阿部泰郎前掲論文参照。
- (93) 渡辺雄二「九州の八幡縁起絵」『佛教藝術』一八一、一九八八年にも指摘がある。
- (94) 例えば萩原龍夫「神祇思想の展開と神社縁起」前掲『寺社縁起』所収を参照。
- (95) 例えば焼失した石清水本。永享五年（一四三三）足利義教の奉納。
- (96) 西田長男は宇佐放生会の細男を神功皇后の新羅征伐の説話に基づいて案
- 出された可能性も指摘している。（前掲「安曇磯良統編（下）」）
- (97) 渡辺雄二前掲論文参照。
- (98) 前掲論文及び「伎楽・舞楽の地方伝播」『民俗芸能研究』一号、一九八五年を参照。宇佐宮楽所については中野幡能「雅楽と楽所」『八幡信仰史の研究（増補版）』（上）一九七五年参照。
- (99) 前掲「宇佐八幡宮放生会の傀儡戯再考」。
- (100) 前掲中山論文が指摘。
- (101) 「称宜太夫兼伶人大神朝臣北崎道代書上帳」、中山論文より引用。
- (102) 中山論文が指摘しているように「社人菅原姓小野但丸書上帳」（明治三五年）所収の宇佐宮関係文書には福宜大夫による支配が窺われる。
- (103) 放生会と市神については今後の課題としたい。
- (104) 会式参照。
- (105) この記述は西田長男前掲論文と『大分市史』下巻「民俗志」によった。
- (106) 前掲『大分市史』下巻「民俗志」。
- (107) 同右より引用。
- (108) 同右。
- (109) 「柞原八幡宮文書」五二号『大分縣史料』九、一九五六年。
- (110) 「柞原八幡宮文書」五三号『大分縣史料』九、一九五六年。
- (111) 「柞原八幡宮文書」六六号『大分縣史料』九、一九五六年。
- (112) 「柞原八幡宮文書」九八号『大分縣史料』九、一九五六年。
- (113) 「柞原八幡宮文書」五六号『大分縣史料』九、一九五六年。
- (114) 「柞原八幡宮文書」九六号『大分縣史料』九、一九五六年。
- (115) 「柞原八幡宮文書」二二六号『大分縣史料』九、一九五六年。
- (116) 『日本祭祀行事集成』二巻、一九六九年。
- (117) 同右。
- (118) 「細男をめぐる」『専修国文』四六、一九九〇年。
- (119) 西田長男前掲論文。
- (120) 同右指摘の福岡県宇美八幡神楽座の「異国征伐」、大分県筑紫郡岩戸村岩戸神楽「磯良」、大分県企救郡小倉篠崎八幡の神楽「三韓征伐」など。
- (121) 『神道大系神社編五十阿蘇・彦山』一九八七年。
- (122) 同右。
- (123) 「中世藝能座の成立」『中世藝能史の研究』一九六〇年。

- (124) 「中世の村田楽」『神々と村落』一九七八年。
- (125) 折口が前述論文で言及して以来、弟子も海部芸能論の根拠地とする。
- (126) 儀礼の記述に関しては、三宅安太郎・上野正澄・筑紫豊「現況報告編」『福岡県文化財調査報告第二十四集志賀海神社祭事資料集』一九六一年によった。
- (127) 同右。
- (128) 同右「概説文獻編」所収。
- (129) 同右「参考文献編」所収。
- (130) 同右。
- (131) 同右。
- (132) 中世杵築社については井上寛司「中世出雲一宮杵築大社と荘園領支配」『日本史研究』二二四号、一九八〇年及び松園斉「出雲国造家の記録讓状作成の歴史的背景」九州大学国史学研究室編『古代中世史論集』一九九〇年を参照。
- (133) 宝治元年（一二七四）「杵築社神官等解」『鰐淵寺文書』『鎌倉遺文』六八九四号。
- (134) 同右。
- (135) 「造宮遷宮日記注進」『出雲国造家文書』一五号。
- (136) 同右。
- (137) 「造宮所遷宮注進」『出雲国造家文書』一六号。
- (138) 宮地直一「諏訪史第二巻後編」一九三七年。
- (139) 『諏訪史料叢書』第一巻、一九二五年所収。
- (140) 前掲書。
- (141) 山路興造「荘園鎮守社における祭祀と芸能——若狭三方郡を中心として——『藝能史研究』六〇号、一九七八年、及び朝比奈威夫「若狭地方の宮座——若干の事例と考察——」『民俗と歴史』四、一九七七年を参照。
- (142) 同右。
- (143) 同氏の御教授による。
- (144) 下笠の事例の記述は喜多慶治「滋賀県草津市下笠町の宮座と同所老杉神社の神事について」『近畿民俗』三四号、一九六四年と伊東久之「草津の宮座と祭礼」『草津市史』第一巻、一九八一年による。
- (145) 伊東前掲論文より引用。

- (146) 「足利尊氏寄進状」『桂林集』所収。
- (147) 喜多慶治前掲論文。
- (148) 同右。
- (149) 中山太郎「細男舞」『日本民俗学一神事篇』一九七六年を参照。
- (150) 『神道大系神社編二十九日吉』一九八三年。
- (151) 永田衡吉前掲書「八幡古表神社・古要宮の傀儡戯」。

(補註)

中野幡能は「宇佐宮」（一九八五年）において、福岡県行橋市大字草葉の草葉神社（豊日別宮とも称される）について触れている。氏は、「豊日別宮と神事に奉仕する神人は諸村に散在していた。官幣太神宮細男楽の楽人は『健児』といい、楽の頭は『楽頭』といわれ、上毛郡黒土村山崎・矢幡氏であった（『豊日別社文書』）」と述べている。

付記

成稿後、石黒吉次郎「細男をめぐる」（『専修国文』四六、一九九〇年二月）を知った。本稿で論じた細男の事例をほとんど網羅している論文である。氏は、細男の始源を北九州に求め、それが畿内に伝播したという見解をとり、「畿内に於いては、北九州の細男舞の祝禱性、御霊鎮魂性を受け継いで、種々の祭礼の場で細男が行なわれていたが、（中略）これが田楽や獅子舞、王の舞、或いは猿楽等比べて、格の高い、より宗教的な、神聖なものとされていたことが想像され、その神秘性故に呪術に優れたものとされて畿内の祭礼でもはやされていったものであろう。」（八頁）と論ずる。また、中世における細男説話の変容を元寇と関らせる視点をとられておらず、この点で本稿とは結論が大きく異なるものである。

（国立歴史民俗博物館民俗研究部）

Sei-no-o in Divine Performance

FUKUHARA Toshio

Sei-no-o, a dance performed by human being and marionette, is one of the riddles in the history of Japanese performing art. Conventionally, *Sei-no-o* has been understood from the viewpoint of *Hōjōe* (ceremony in which captured animals and fish are released to mountains, fields, ponds, rivers, etc. on the basis of Buddhist thought) at the Hachiman Shrine in Kyushu, and there was an implicit understanding that it was transmitted from Kyūshū to the Kinki District. In contrast to this understanding, the author considers that *Sei-no-o* performed by human beings came into being as one of the artistic elements at large temples and shrines in Nara and Kyōto. *Sei-no-o* dates back to the end of the 9th century at the Tōdai-ji Temple, and to the 11th century at the *Goryōe* (ceremony to placate revengeful spirits) in Kyōto. The existence in the 12th century of *Sei-no-o* with a white mask and a drum has been proven. At the Wakamiya Festival of the Kasuga Shrine, *Sei-no-o* appeared at festivals from the Heian period on. In the Middle Ages, *Sei-no-o* was also seen at the Hōryū-ji Temple.

The *Sei-no-o* performed by human beings was transmitted from the Kinki District to the *Hōjōe* of the Usa Hachiman Shrine, where it was given a mythological significance as a ceremony symbolizing the enhancement of divine prestige after the repulsion of the Mongol invasions. It followed the same pattern as the transformation of the *Hachiman Engi* (History of the Hachiman Shrine) and its illustrated history. *Sei-no-o* was also transmitted from Usa to Yusuhara Hachiman and Aso. It was transmitted to Ōtori, Suwa and Kitsuki Shrines as a part of the religious rites of the first-local-shrine and local-government type.

On the other hand, the existence of *Sei-no-o* performed by a marionette in the Kamakura period centering around the Iwashimizu Hachiman Shrine can be proven. It was performed by two marionettes (*Takeuchi* and *Korashin*) at the Hinotō Festival served by Ōyamazaki *Jinin* (subordinates at the shrine of Ōyamazaki). Marionette performances also existed at the *Hōjōe* of Usa in the Kamakura period, but these are not recognized as *Sei-no-o*. The marionette performances and *Sei-no-o* of Usa were dedicated to *Hyakudayū* (guardian deity of marionette players). The *Sei-no-o* of Yusuhara Hachiman Shrine is not a marionette performance, either; however, traces of marionette performance do remain, and *Zenjinō* and *Takeuchi* were the gods of marionette players. *Sei-no-o* and marionettes were inseparably related to each other, and it can be said that the *Sei-no-o* dance by human beings had the meaning of placating the gods of marionettes. The gods *Zenjinō* and *Takeuchi Okami* (the great god of *Takeuchi*) at the Ebisu Shrine in the *Tongu* (temporary shrine) of the *Hōjōe* of the Usa Hachiman Shrine, and at the *Hamadono* of the Yusuhara Hachiman Shrine, symbolize the relationship between the market established at the *Hōjōe*, Ebisu as the god of commerce, and the marionettes that serve Ebisu.